

ハインリヒ・マンとヨーロッパ植民地主義

三浦 淳

目次

はじめに

第一節 第一次世界大戦期におけるハインリヒ・マンの植民地観——弟トーマス・マンと比較しつつ

第二節 第一次世界大戦終了後におけるハインリヒ・マンの植民地観

(一) 1920年代

(二) 1930年代及びそれ以降

第三節 ヨーロッパ人の植民地観を概観する——ハインリヒ・マンの先行者たち

(一) スペイン

(二) 英国

(三) フランス

(四) ドイツ

(五) ハインリヒ・マンの植民地観の位置づけと今後の課題

注

はじめに

最初に、むかし私自身が書いた論文について、反省を含めつつ振り返っておく。

2001年の春、私は日本独文学会の機関誌『ドイツ文学』に論文を載せた。ハインリヒ・マン（以下、ハインリヒとする）が晩年（1946年）に刊行したメモワール『一時代を閲する Ein Zeitalter wird besichtigt』を論じたものである。この時の『ドイツ文学』誌は「20世紀の記憶 Das Gedächtnis des 20. Jahrhunderts」という特集を組んでおり、私の論文もそのために書かれた。そしてこの論文の最後で、私はハインリヒの植民地観に触れた。彼はメモワールの中で次のように述べている。

大英帝国は地球の四分の一を占めているが、ドイツ人が考えるような意味での帝国ではない。公益のために多くの人々が自発的に結合したのである。自治領（Dominion）と呼ばれるお互い隔たった地域は、さもなければ貧しく、道徳的にも荒廃し、何より途方に暮れてしまうだろう。大英帝国に「操られて」いるのではなく、庇護され、力を与えられているのだ。

[フランスの]第三共和国は植民地帝国を築いた。規模と力において英国のそれに次ぐものだ。(…)フランスは誰をも抑圧しなかったし(…)金融面を除けば植民地スキャンダルもなかった。その有色臣民(farbige Untertanen)はフランスの文化と言語に惹かれた。本当にフランス人になりたいという榮譽欲は、明らかに(…)他のどこよりも強かった。

以上のようなハインリヒの発言を引用した上で、私は次のように述べた。

こうした見解を現代的な視点で糾弾するのは野暮というものであろう。古い衰えた無知な頭脳がユートピア的夢想を紡いでいるだけであり、彼のソ連観同様、真面目に検討するにも値しないのだ。ただ、「有色臣民 farbige Untertanen」という表現には正直のところぎょっとする。出世作 "Der Untertan" が含んでいた痛烈な風刺やイロニーは片鱗もなく、大戦後の世界地図の激変を予想だにしない無邪気な「家父長的ヨーロッパ人」の姿が見えるからだ。ハインリヒ・マンは、ドレフュス事件で鮮やかな役割を果たした知識人の姿を理想化し喧伝することで世に広く知られる文学者となった。その30年後の結末が(…)ソ連讚美や植民地主義讚美で終わったという事実は、20世紀における知識人の運命そのものを暗示しているとは言えないだろうか。⁽¹⁾

しかし、この論文を書いた当時の私は勉強不足だった。それは「有色臣民 farbige Untertanen」という表現に触れた箇所に表示されている。ここで私は、ハインリヒ自身が第一次大戦の直前に『臣民 Untertan』という小説を書いてドイツ人の権威主義や俗物根性を批判したことに絡めつつ、植民地の現地人に対するハインリヒの姿勢は、彼自身が『臣民』で批判したはずの旧弊なドイツ人と変わらないのではないかと述べた。そのこと自体は間違っていたとは思わない。しかし当時の私が気づかなかったのは、ハインリヒのこの表現が、植民地帝国を築いていた時代の英国やフランスの表現を踏まえたものだった、という点である。すなわち、英語では subject、フランス語なら sujet が「臣民」にあたる単語で、ハインリヒはそのドイツ語訳として Untertan を用いたのである。つまり、当時ヨーロッパ人は植民地の現地人を呼ぶのにそのような表現を共通して使っていたのだ。

さて、以上のようなハインリヒの姿勢に対しては、最近のドイツでも批判の声が上がっている。数年来、彼の評論・エッセイ類のみを集めた批判版エッセイ全集が刊行されつつあり(Heinrich Mann: Essays und Publizistik. Kritische Gesamtausgabe. Aisthesis Verlag(Bielefeld), 2009-)、ハインリヒ研究の専門誌である "Heinrich Mann-Jahrbuch" の2012年号に、その第2巻を紹介する(编者による)一文が掲載されたが、その中にハインリヒが植民地主義を肯定していたことは問題である、という文章が盛り込まれていた。⁽²⁾ また、2013年に出た研究書においても、あまり詳述はされていないが、ハインリヒはフランス崇拜のあまりフランスの植民地主義を讚美していたと述べられている。⁽³⁾

すなわち、近年のポストコロニアリズムの潮流によって、過去のヨーロッパの文学者や知識

人の言説を改めて検証し、その植民地観を問いなおそうという傾向が強まっているのである。

本論文は、以上のような動向をふまえて、ヨーロッパ植民地主義に関するハインリヒの第一次世界大戦期及びそれ以降の言説を検討しようとするものである。

第一節 第一次世界大戦期におけるハインリヒ・マンの植民地観——弟トーマス・マンと比較しつつ

第一次世界大戦中の1916年にハインリヒは「ヨーロッパ人 Der Europäer」というエッセイを発表した。その冒頭で彼は以下のように述べている。やや長い引用になるが、ハインリヒの思考形態が余すところなく表れているので、辛抱してお読みいただきたい。

その〔ヨーロッパ人の〕精神はあらゆるものを宿しているが、理性と勤勉によって規定されている。我々は節度と有用性を愛する。自己破壊的な法悦者と、他者を救おうとする聖人との間であって、我々は法悦の人ではなく助力を与える人をヨーロッパ的と感じている。力に酔う征服者に我々は馴染めず、理念によってすでに一になっていたものを善意をもって統合する指導者だけに親しみを覚える。(…)機械工場や銀行の建物は天にも届くほど高くなり、地峡や山々は掘削され、遠い地域は、可能な限り多くの人々が幸福になるようにと、わが大陸の規則に順応させられる。最大多数に有用であることこそ我々の行為と志向の核心部分なのだ、仮にさしあたりは少数の者にしか有用でなかったとしても。なぜなら我々はお互いに対して良心を持っているから。他者への共同責任感が我々のうちに備わっている。こうした共同責任感を完全に否定する者はいないし、この責任感がいつかはあらゆる人間に等しく恵みを与えるだろうことを我々は知っている。ヨーロッパ的な意味における働くことこそ高貴への道であり、正義の概念を初めて生み出すのである。

人類の運命を向上させようという考えを持たずには、我々〔ヨーロッパ人〕は敢えて他の種族の前に歩み出ようとはしないだろうし、まして彼らを征服しようなどとは思えない。ローマ人は金髪で南方の活気に満ちていたが、同時に冷徹だったのであって、全世界を「ローマの平和」のもとに統合して養ったローマ人こそ、我々の本質の中核をなしていたのだ。さらに十字軍、この全ヨーロッパ的な企てにひそむ空想性には、実際の側面が見え隠れしている。はるか彼方のおとぎの国が、聖墓と呼ばれたあの魔法の場所〔イェルサレム〕を含めて、精神の目には見えていた。だが燃える精神は冷静に計算をする能力をも持ち合わせていた。そして異教徒のおとぎの国は、政治的かつ経済的な目的でもあった——口に出してそう言わずともである。なぜなら自明のことを、つまり生きることと金儲けを欲することを我々は口に出しはしないからである。我々が口に出すのは、人間に共通して見られる事柄ではなく、特殊ヨーロッパ的な事柄である。つまり、我々は商売をしている地において、いつでも何かしら道徳的な向上をももたらしている、ということだ。東インド会社は資本家から成り立っているが、彼らは、聞くところでは人間的な資本家で

あって、相手を幸福にしつつ儲けることを念頭においているという。そして仮に彼らが、現代にいたるまでの後継者をも含め、あらゆる略奪者の中で最も苛酷であったとしても、彼らの振るまいが正しかったということ、英国なかりせば人間としてのほどほどの幸福が、たとえ生命の安全性が増したという点だけであっても、インドとエジプトの肌の浅黒い人々には決してもたらされなかつたであろうことは疑い得ないのではないか。それはしかし単なる生命以上のことだ。すなわち魂の覚醒を、数千年にわたって眠り続けていたあの人々のもとへ、我々のみがもたらしたのである。叛乱が生じたアジアの最奥部にあって、立ち上がった者たちの中に躍動していたのはヨーロッパの意識であって、アジア人の意識ではない。人間精神の尊厳をなすものが理性であるが、その理性の叛乱は古代ギリシャ人の時代から我々に受け継がれてきたものであり、この遺産のために我々は異国の民と戦ったのであり、この遺産をこそ我々は異国の民に伝えたのである。今もなお——財産が手元にあると信じて安心しようというのではない！——我々は優勢な敵に対して毅然と身構えており、少数の目ざめた戦士が太古のままの世界全体の暗い圧力と戦っているのだ。今なお我々はテルモピレーに立っているのだ。⁽⁴⁾

ハインリヒ・マンは1921年10月ベルリンで、また21年12月ウィーンでの講演でもこの「ヨーロッパ人」の原稿を読み上げている。⁽⁵⁾つまり、第一次大戦終了直後においてもこうした植民地観には変化がなかったと見てよい。

こうしたハインリヒの植民地観は、必ずしも彼独自のものではない。詳しくは第三節で述べるのでここでは概略的な記述にとどめるが、歴史的に見るなら、1492年にコロンブスが西インド諸島に到達して以降、ヨーロッパによるアメリカ大陸進出、および先住民収奪が進行する。しかし初期にはヨーロッパ人の略奪行為を正当化する言説と並んでそれに対する批判も存在していた。また、「高貴なる野蛮人」或いは「未開であるが故に自然の中で幸福に暮らす先住民」といった肯定的なイメージも（いささか身勝手なものではあるが）それなりに流布していた。

しかし19世紀後半に入るとこれが一変する。エンゲルスやルイス・ヘンリー・モーガンなどにより、単線的発展史観が主流となるからだ。つまり文明は一元的に、未開の状態から段階をふんで高等な文明に発展していくという史観で、そうした立場からすれば、アメリカやアジアやアフリカの先住民は遅れた段階に停滞している民族なのであって、発展したヨーロッパの文明により征服・教化されて当然と見なされるのである。なお、モーガンはアメリカ人の文化人類学者であるが、彼の学説はアメリカで先住民や黒人への差別を正当化するためにも使われていた。そうした単線的な発展史観はマルクスにも受け継がれており、彼が英国のインド支配を正当化したことはよく知られているとおりである。

また知能は人種ごとに異なっており、それは頭蓋骨の形などに表れているとする学説も19世紀末から20世紀初頭にかけては欧米で広く信じられていた。そうした科学は、今からすると未熟な部分も多い似而非科学だったわけだが、当時としては科学としての権威を備えていたので

あって、したがって科学こそが差別を推進した張本人だったとも言えるのである。⁽⁶⁾

上で引いたハインリヒの「ヨーロッパ人」に関して言えば、最後にテルモピレー、つまり戦争をしかけてきたペルシャ帝国を古代ギリシャが迎え撃った故事を持ち出しているところに、ハインリヒの思想上の特徴が端的に表れている。いや、これも彼独自の思考ではなく、当時にあつては多数のヨーロッパ人の思考形態であつた。テルモピレーこそはヨーロッパが「アジア」を敵に想定して自己正当化を行った古い例であり、また古代ギリシャがヨーロッパの源流なのだとするヨーロッパ人史観の原点でもあつたことをふまえるなら、ハインリヒの「よいことはすべてヨーロッパ人から」というこのような自己中心主義丸出しの史観もむしろ平凡なものだったとも言えるのである。十字軍についての見方もそれと同一線上にある。

さて、ハインリヒの弟トーマス・マン（以下、トーマス）が第一次大戦直後に大部のエッセイ『非政治的人間の考察 *Betrachtungen eines Unpolitischen*』を刊行し（1918年）、そこで兄ハインリヒを「文明の文学者 *Zivilisationsliterat*」と呼びつつ厳しく批判したことはよく知られている。ここでは兄の植民地観を批判している箇所を見ておきたい。

彼〔文明の文学者＝ハインリヒ〕の要求する政治化とは、叛乱への教育である。彼の説によれば、叛乱は、しかし、何ものにもましてきわめてヨーロッパ的なものである。たとえば、インド人たちが英国の支配に対して叛乱を起こすたびに、彼らは、自分たちはみずからの精神に基づいて行動しているのではなく、ヨーロッパの精神によって行動しているのだ、自分たちの「たましいを目ざめさせてくれた」（政治化してくれた、といつてもいい）のは英国人であるということ、しみじみ肝に銘じるだろう、というのである。⁽⁷⁾

ここでのトーマスが上で引用した「ヨーロッパ人」の文章を要約していることは容易に見て取れる。そしてその少し後で、トーマスは以下のように述べている。

フランスが英国に援護されて、1870年以前の厚かましさにひけをとらぬ厚かましい気まぐれで諸条約を平然と踏みにじり、モロッコに「侵入した」とときには、彼〔文明の文学者＝ハインリヒ〕の反帝国主義的モラリズムは、どうなっていたのだろうか。彼は、フランスを讃嘆した。眉をつりあげてフランスの強大な植民地帝国を讃嘆し、帝国主義的デモクラシーをたたえた。⁽⁸⁾

ここでトーマスが取り上げているハインリヒの帝国主義的言説は、書かれたものではなく、直接兄と会話した（1911～12年の冬、またはマルヌの会戦の直後）中で発言されたものだろうと、最新のトーマス・マン全集で『非政治的人間の考察』の巻に注釈を付けた Hermann Kurzke は推測している。⁽⁹⁾

そしてそのような帝国主義に対してトーマスは批判を加えるのだが、第一義的には第一次大

戦当時ドイツがおかれていた状況を意識してのことであるのは言うまでもない。以下の文章にそうした姿勢が鮮明に表れている。

ローマ的西欧は、文学的である。このことが、ローマ的西欧をゲルマンの世界から、より正確にいえばドイツ的世界から(…)区別している。(…)それはフランス革命において全盛期を迎えた精神であり(…)。我々が「文明」と名づけるもの、みずからもそう名のっているものは、まさしくこの勝利の進軍、市民的に政治化され、文学化された精神のこの拡張伝播、この精神による地球の植民地化にほかならない。このような文明の帝国主義こそ、ドイツがそれに対して「プロテストする」ローマ的統合思想の最後の形態である。⁽¹⁰⁾

トーマスは、ハインリヒの使っている図式、つまり古代ローマから受け継がれたフランスの文明という図式そのまま用いている。違うのは、ハインリヒにとってはだからこそフランスは優れておりドイツは駄目だという結論になるのであるが、トーマスにとっては一元的な文明観こそが野蛮なのであって、ドイツはそうした帝国主義的な価値観にプロテストする存在と想定されていることなのである。

ここでトーマスが批判している兄の思想は、単にハインリヒの思想であるだけでなく、実際にフランスの、そして古代ローマの思想でもあった。フランスの共和主義者にとって、共和政の古代ローマこそが理想の国家形態だったのであり、またそれは古代ローマ帝国の偉大さとも結びついて、だからフランスも偉大であるという見方につながっていくからである。すでに古代ローマにおいても、文筆家として有名なキケロは、ローマこそが最高度の文明国家であるから、周辺の野蛮な地域の人間たちを文明化する使命を担っているという思想を持っていた。これは帝国主義時代に、アジアやアフリカを文明化するのだと称して植民地化していったヨーロッパの姿勢と共通している。⁽¹¹⁾

現在の目から見れば、「進歩主義者」ハインリヒがヨーロッパ植民地主義の肯定者であり、「保守主義者」トーマスが今日で言うポストコロニアリズム的な位置にいることは明らかであろう。むしろ、トーマスにしても今日的な意味合いでの多文化主義を奉じていたからというよりは、第一次大戦で自国擁護のために古代ローマ・英仏中心史観を批判する必要に迫られ、結果としてそうなったという面が強いわけではあるが。

ともあれ、ヨーロッパが植民地主義によってアジアやアフリカを蹂躪した時代とは、ヨーロッパ内部では民主主義が浸透した時代でもあった。フランスならば、植民地を大幅に拡大した19世紀は第三共和政の時代に当たってもいた。この点についてもトーマスは明快な指摘を行っている。

しかし文明の文学者の態度でとりわけ腑に落ちないのは、まるでデモクラシーは帝国主義や資本主義となにか対立するものででもあるかのような口ぶりであることだ。デモクラシーは、むしろこれと志をひとつにした同一物であると言っても構わないのではないだろう

うか。デモクラシーが存在する国では（…）デモクラシーが「美」のヴェールで一切の帝国主義的背徳をおおい隠し、文明の文学者の目をたぶらかせているのだ。⁽¹²⁾

国内では平等を旨とする民主主義、対外的には差別性を伴う帝国主義という、19世紀から両大戦間の時期までのヨーロッパが抱えていた矛盾は、「進歩主義者」であるハインリヒより、「保守主義者」であるトーマスにはっきりと意識されていた。

トーマスは触れていないが、フランスでは1880年代に共和主義者として政権を担ったジュール・フェリーこそその典型であった。国内では義務教育の確立、女子教育の普及、組合・結社・言論の自由の制度化など、近代化を推進する民主主義政治家として活躍したフェリーは、しかし対外的には強硬な植民地拡大主義者に他ならなかった。これには、1870年の普仏戦争でプロイセンに敗れたフランスがアルザス・ロレーヌ地方を失い、その代償としてアフリカなどに領土を求めたという面もあるのだが、いずれにせよフェリーにとって国内政治での民主主義は、非ヨーロッパ地域にはいささかも当てはめられるものではなかったのである。⁽¹³⁾

民主主義の進展と資本主義の発達は手に手を携えており、膨張する生産力が国内での消費では十分な収入へとつながらなくなったとき、その矛先が海外の植民地に向かうこと、そしてヨーロッパ中枢部では文民の統制下にあった軍隊と警察が、植民地においては逆に主導権を握るといった事情を、ハナ・アーレントは『全体主義の起源』第二部の『帝国主義』においてははっきりと指摘している。⁽¹⁴⁾

共和主義者はなぜ植民地主義を支持したのだろうか。理由はいくつか考えられる。

まず、左派の単線的な発展史観が、先進国による野蛮な後進地域の指導・教育という見方に合致したことが挙げられる。文豪ヴィクトル・ユゴーはヨーロッパ人のアフリカ征服を強く支持したが、その根底にはこうした見方があった。⁽¹⁵⁾

次に、民主主義の時代にあっては政治家は大衆に支持されなければ政権を獲得することもできないわけだが、それにはナショナリズムに訴える必要があり、植民地獲得はそのための恰好の材料だったという事情が挙げられる。領土拡大こそ、大衆の持つナショナリズムにかなったスローガンだったのである。そもそも近代における国民意識の形成には、植民地が大きく関わっていた。植民地での異質な民族との出会いこそが、他との区別によって国民の自意識を確立することに寄与したからである。⁽¹⁶⁾

第一次世界大戦期のマン兄弟に話を戻すと、トーマスは『非政治的人間の考察』を書くことでハインリヒにとってのフランスが理念であり現実ではないと批判したわけだが、そこには外国人がフランス及びフランス文化をどう見るかという一般的な問題が含まれている。ポストコロニアリズムが浸透した現代では、ブルガリア出身でパリで活動したジュリア・クリステヴァについて、彼女がフランスの植民地主義に含まれる問題点を看過して単なる啓蒙という範疇でしか理解していないという批判がなされるが⁽¹⁷⁾、ハインリヒは言うならばクリステヴァの先行者だった。

トーマスは上記引用箇所の前後もアメリカ、イタリア、英国の帝国主義を具体例を挙げな

がら批判しているが、特に英国によるインド支配の残酷さに言及している箇所が目を惹く。ここでは兄の帝国主義擁護をも批判しているが、兄の書いた「ヨーロッパ人」が引用されている。

戦争中に彼〔文明の文学者〕は、英国精神をこの〔商売と道徳をセットにする〕ヨーロッパ人気質の真髓であるとして讚美した。「東インド会社は、資本家たちによって構成されていた。しかし、彼らは、人々を幸福にすることによって金を儲けようと意図する人道的な商売人であった。(…)彼らがたとえあらゆる搾取者のうちで最も苛酷な搾取者であったとしても——彼らのしたことが結局は正しかったということ、もし英国の統治がなかったならインドの蒙昧な大衆は人間の相対的幸福（たとえそれがかるうじて生きているだけの生活が比較的安定しているというだけのことに過ぎなくても）をけっして知ることはなかったであろうということは、疑いをはさむ余地があるか」と。とんでもない。これを疑わずにおれようか！ インドでは、死亡率が最近三十年間に二四パーセントから三四パーセントに上昇した——と読んだことがある。しかも、これはペストと飢餓によるものであるが、英国人の支配者的冷血さは、ペストや飢餓の中に人口過剰の予防手段を見る。(…)所詮、これはアジア、「蒙昧な大衆」、^{ニガー}黒人に関する事柄に過ぎない。「ヨーロッパ人」たる者は、内に向かつては民主主義者であっても、外に向かつては貴族主義者である。⁽¹⁸⁾

「ヨーロッパ人」の最初の部分は、本節の最初にまとめて訳出しておいた。ここでトーマスの批判と合わせて読めば、ハインリヒの思考に欠けているものが見えてくるだろう。

トーマスの批判は、英仏を持ち上げるハインリヒに対してだけ向けられていたわけではない。トーマスは、ゲーテが『エッカーマンとの対話』（1829年9月1日）で、英国がウィーン会議で主張した奴隷制廃止について、英国人は人道上の理由としているが、実は英国の実利のためなのだと批判的に述べている箇所を引用している。⁽¹⁹⁾

トーマスはさらに「正義と真理に抗して」の章ではロマン・ロランを批判してモルトケの言葉を引用している。フランスは言っていることとやっていることが違う、援助という名の下に略奪を行っている、という意味のフランス批判である。⁽²⁰⁾ さらにトーマスは、ロラン自身（その『戦いを超えて』の中で）引用しているマックス・シェーラーの文章を引いている。『諸大国の国民的理念について Über die National-Ideen der großen Nationen』という小論文の中でシェーラーは次のように言っているのである。

諸国間の平等と同価値、これがフランスの国民的デモクラティズムであり、同時にその世界観の上で恒常的な思想である。——フランスの哲学と科学との全体を支配しているのも、この思想である。ところが、ナポレオン戦争以来、フランスは〈人権〉と恒常的な歴史観というこのフランス特有の思想内容を自国内で実現するのみならず、これを世界中に拡め、全世界に、すべての国々に充満させることをフランスに固有な、最高に国民的な使命だと見なしている。この使命は、しかし、フランスにとっては、国民的栄光というまっ

たく独特なガリア的価値につつまれている。すなわち、人類の〈指導者〉〈教師〉〈教育者〉という榮譽——これがフランスの国民的使命感である。だが、まさにこのような自負と思想は、その担い手を極端なまでに攻撃的かつ戦闘的にするものである。つまり、自国の使命についてフランスとは異なった、フランスから見たら軽蔑に値するような見解を持っている他の民族、あるいは、自国独自の国民的精神を主張して、フランスの指導権に服そうとしない他の民族のすべてに対して、極度に攻撃的にする。このことにフランスが昔から気づいていないらしいのは、なんとも無邪気きわまる話だ。⁽²¹⁾

以上、第一次大戦中ハインリヒが表明した植民地観と、それに対するトーマスの批判を紹介した。むろん先にも述べたように、トーマスの意図は植民地や現地人の代弁者になることではなかった。英仏の侵略者としての側面を明示し、そうした面から顔を背けて両国を理想化している文明の文学者＝ハインリヒを撃ち、第一次大戦を戦っているドイツを擁護することが本来の動機だったのである。けれども今の目で見れば、結果としてトーマスは「先進国」である英仏の植民地主義を批判し、世界や歴史を見るためには多様な観点や史観が必要だとする、現代に通じる複数主義を打ち出すことになったのである。

第二節 第一次世界大戦終了後におけるハインリヒ・マンの植民地観

(一) 1920年代

さて、第一次世界大戦中の以上のようなハインリヒの植民地観はその後変化を見せたであろうか。第一節の最初で「ヨーロッパ人」の冒頭を引用した直後に、ハインリヒの見方は1920年代初頭においては変化がなかったと述べたが、20年代の最後までこの点では同じだったと考えられる。以下の文章は1924年に新聞に発表され、29年に単行本（エッセイ集）に収録された「ヨーロッパ合衆国 V. S. E. [Vereinigete Staaten Europas]」という論考の冒頭部分である。

われらの父祖の立ち姿はどれほど偉大だったことか！ ヨーロッパ民族に属する者たちは、世界を専制的に支配する文明によって光り輝いていた。往時にはアジアの奥深くに至るまで、ヨーロッパ人の中に地上の権力を、さらにはまた多分精神的な優越性をも見ない者は、賤民であれ学識豊かな者であれ、まずもって存在しなかつただろう。彼らはこの間、身をもってそのことを認識したからこそ、自らの古い知恵を否定し、今では我々のような力と理性を備えた人間になりおおせているのだ。無論、我々に反抗する中で、である。英国だけではない。現在かの地では我々すべてが問題視されている。我々の輝きは先の大戦以降は陰りが出てきている。我々は並の人間となった。世界は初めて地上での我々の優位が終わると予想するようになった。これはヨーロッパのどの地にも当てはまることだ。

(…) 植民地を所有したことすらない国でもヨーロッパはヨーロッパなのだ。ヨーロッパが異郷の民に与えた恐怖、そしてその裏で彼らから受けていた尊敬の念を考えれば、我々

が〔大戦により〕ヨーロッパの地でいかに愚かに振る舞ったかは明らかだろう。

われらの父祖にとっては、ヨーロッパの文明が地上のいかなる他民族と比べても無条件で勝っていることは自明そのものであったが、彼らは今なら驚愕を押さえきれないだろう。何だって？ アジアが、再びアジアの一員になったロシアの指導の下で統一的世界強国になろうとしているだと？ 何だって？ すでにグライ・ラマがおのれの宗教を布教しようと西洋に向けて祈りを捧げているだと？ 何しろ今、ヨーロッパの破産国家群が一致しているのは、絶えずアメリカを崇拜しその施しに与ろうという態度においてだけなのである。われらの父祖がこうした状況を目の当たりにしたなら、「恥ずべきことだ」という言葉を発していただろう。⁽²²⁾

一読して分かるように、第一次大戦後にヨーロッパの地位が低下し、アジアやアメリカが勃興しつつあるという認識を示してはいるのだが、しかしヨーロッパ文明が普遍的で、アジアやアメリカもその恩恵によって地位を向上させたのだという見方において、第一節の最初に引いた「ヨーロッパ人」のヨーロッパ中心史観にはいささかの变化もない。

この「ヨーロッパ合衆国」という文章は、リヒャルト・クーデンホーヴェ＝カレルギー伯爵（Richard Coudenhove-Kalergi, 1894-1972）が1923年に発表した「パン・ヨーロッパ」構想に、基本的には賛成しつつ書かれている。パン・ヨーロッパ構想とは、第一次大戦直後から（シュペングラーにより）「西洋の没落」が言われるようになり、19世紀においてヨーロッパが地球上で占めていた地位が怪しくなってきた状況をふまえ、ヨーロッパがまとまってひとつの連合体となることでその地位を維持できるとする主張であった。

この構想は、単にヨーロッパだけでなく、地球上が5つの大きなブロックに分かれることを前提にしている。具体的にはヨーロッパ以外は、大英帝国、ロシア＝ソ連、南北アメリカ、そして東アジアである。大英帝国をヨーロッパに入れていないのは、アジアやアフリカの広大な植民地を含めればひとつのブロックになり得るという理由からであり、ロシアをヨーロッパに入れていないのは共産主義国家とヨーロッパが一緒になることはできないという理由からである。ただし、ハインリヒはヨーロッパ・ブロックから大英帝国やソ連を除くことに賛成していない。⁽²³⁾

クーデンホーヴェ＝カレルギー伯爵は母親が青山光子という日本人だったこともあり、日本やアジアのことをよく知っていたのではと患い始めるが、彼はオーストリア・ハンガリー帝国の外交官だった父が日本勤務中に日本人女性と結婚して生まれた子で、幼少期に日本を離れ、以後1967年、73歳で日本を再訪するまで母の祖国に帰ることはなかった。実際、『パン・ヨーロッパ』を読んでも、東アジアについては中国か日本がいずれ覇権をとるだろうという大ざっぱなことしか書いておらず、アジアに対する関心も高いとは思えない。⁽²⁴⁾ただし、ハインリヒはこの構想が公けになった直後に「ヨーロッパ問題 Problem Europa」という文章を発表しており、そこで伯爵が半分日本人であることに触れて、だからこの手の問題に広い視野を持っているのだという認識を示している。⁽²⁵⁾

さて、大英帝国とその植民地で一つのブロックという考え方から分かるように、伯爵の「パン・ヨーロッパ」構想とは、英国に限らず当時ヨーロッパが所有していた植民地はそのまま維持することを前提にしている。この構想はしばしば現在のEUを先取りしたものとされるが、その点で大きな違いがあることは指摘しておかねばならない。この点について、カレルギー伯爵の『パン・ヨーロッパ』を邦訳した鹿島守之助は、邦訳版『クーデンホーフ・カレルギー全集』第一巻（1961年再版）に「再版のことば」という文章を収録しているが、そこで興味深いエピソードを紹介している。すなわち、兩大戦間の時期に外交官としてベルリンに勤務していた鹿島が、まもなく帰国という時期に、偶然オーストリアでクーデンホーフ＝カレルギーと会った際、次のように言われたという。「余はパン・ヨーロッパを、君はパン・アジアを組織すべきである。パン・アジア成立の上は、パン・ヨーロッパに必ずしも必要でないインドネシアを友情のしるしとして差し上げよう」。(26)

今読むと、いささか驚愕ものの発言ではある。しかし、当時のヨーロッパ知識人の植民地認識とはこの程度だったとも言えるのではないか。本論文がテーマとしているハインリヒの植民地観も、彼固有のものではなく、あくまで当時のヨーロッパ知識人の持っていた観念の一部として捉える必要がある。なおインドネシアは言うまでもなく第二次大戦以前はオランダの植民地であった。

ちなみにハインリヒも1931年4月にある新聞のインタビュー記事で、「ヨーロッパの平和を実現する道とは？」と問われた際に次のように答えており、パン・ヨーロッパ構想は植民地維持が前提であるとしている。

パン・ヨーロッパの理念です。これは一九二四年から見て格段に前進しています。(…)
仮に英国とロシアが同盟に加わらなくともです。——たいしたことではありませんから！——これが実現すれば、五億の人口と一億五千万の植民地人口を抱えたヨーロッパは強固なブロックとなり、成立し得る他のあらゆる大国ブロックに対抗できるようになるのです。(27)

もっとも、アフリカなどの植民地が第二次世界大戦後に独立しても、英国の英連邦やフランスのフランコフォニーなどにより旧宗主国との関係はそれなりに維持されており、経済的にも文化的にも旧宗主国にかなり依存し続けていることも事実である。そうした状況を「新植民地主義」と呼んで批判する向きもあるわけで、その意味で見れば「パン・ヨーロッパ」構想は現在の世界状況とそれほど大きな違いはないとも言えるのかも知れない。

(二) 1930年代及びそれ以降

けれども、1930年代初頭、ハインリヒのこうした植民地観はやや変化を見せる。彼が1931年6月に発表した「植民地博覧会 Kolonial-Ausstellung」というエッセイがある。

パリ万国植民地博覧会 Paris Colonial Exposition は、1931年5月から半年間にわたりフランス

がパリ郊外で開催した博覧会であり、当時フランスが所有していた植民地の産物や現地人が展示品（人）としてヨーロッパ人の目に供された。こうした植民地博覧会は当時英国でも行われており、また一般の万国博覧会で植民地関係の展示場が設けられる場合もあった。それらの中でもこの1931年の植民地博覧会は名高いものである。半年間の会期で約3000万枚以上のチケットが売れ、800万人が入場したという。

しかし、社会主義者、共産主義者、及びシュールレアリストはこの博覧会に反対していた。レオン・ブルームはフランス植民地主義が現地に多くの流血や叛乱を生み、不平等な政策が行われている事実を訴え、フランスの社会主義者たちから大きな反響を呼んだ。また共産主義者は植民地政策とその拡張に反対していたし、レーニンも植民地解放運動を支持する宣言を出し、1920年の第2回コミンテルン会議で承認された。しかしこれらの動きが博覧会に対する一般的な認識に大きな影響を与えたとは言い難い。⁽²⁸⁾ また、労働団体とシュールレアリストは反植民地博覧会として「植民地の真実」という展示会を開いたものの、入場者は5千人程度で、植民地博覧会の800万人に遠く及ばずに終わった。⁽²⁹⁾

さて、ハインリヒは実際にこの植民地博覧会に出かけており、その感想が「植民地博覧会」に綴られている。そこで彼は何を言っているであろうか。以下、冒頭部分を掲げる。

パリの植民地博覧会を訪れた人は一日で三十六万人に及んだ。行楽シーズンは始まったばかりである。外国人は全然来ていない。地元の小市民たちが楽しそうに見物している。地下鉄で来るのだが、これ自体が旅行なのだ。タクシーでも三十分。東洋風の建物の集合体は相当な面積を要するので、かなり郊外に建てられなければならなかったのだ。寺院やカフェの間に善良な多数の人たちがうごめいているが、中に入るわけではない。一国がどれほど広大な植民地を持つのであれ、海の彼方で実際に暮らす親族を持つ人がどの程度いるだろう。アンコール・ワットの寺院やアフリカの城の実物を見た人間がどれほどいるだろう。博覧会で物珍しげに見物する人の数に比べれば、そういう人間はごくわずかだ。

(…)

植民地博覧会は正確には「帝国主義展覧会」という。そして帝国主義を特徴付けていること、とりわけその対象〔＝植民地〕を内的に支配し得ていないことを無意識に再現しているのだ。表面的には兵士たちによって安全が保たれているが、内側はまさにそれゆえに安全が妨げられている。人は主人として或る国にやってくるが、主人はあまり物事を学ばないし、学んだとしてもいつも表面的なことだけだ。人は有色人種に対しては偏見なく、勝利者としてではなく同胞として接しなくてはなるまい。そうすればかの国々は初めて興味深く感じられる。また、そうすればかの国々は有用にもなるのだ。フランス人にはそのことを心得ている者がいる。彼らはヨーロッパがアフリカ以外の植民地を失うだろうと予見している。アフリカの植民地もしかし、全ヨーロッパがそこに参画し得て初めて維持されるし、実りをもたらすものとなるだろう。第二の前提は、土着民との誠実な共同作業、とりわけアフリカで文化的に最も高い層であるアラブ系住民とのそれである。これ以上の

搾取はやめて、同等の権利を与えなければならない。先見の明のある若干の人々の意見では、そのようにすればまだ利用し尽くされていないこの大陸はその真価を発揮するだろう。ヨーロッパは、自分自身に満足できないとしても、アフリカによって長期間守られるだろう、いや、それによってのみ守られる。

ヨーロッパが将来他の大陸と真の関係を持つとするなら、無論ここで今後植民地博覧会を開くこともなくなるだろう。そうした関係に至れば、かの国々はもう慰みの見世物ではなくなるのだから。(…)⁽³⁰⁾

以上のように、ハインリヒの植民地観は20年代までに比べると植民地の先住民に対する見方がいわば人道的になっており、またヨーロッパによる植民地の扱いが必ずしも正当なものではない、という認識も見られるようになってきている。

こうした変化はおそらく、社会主義者らが植民地博覧会に反対していたという状況から来ているのだろう。ここでの引用文にも「フランス人にはそのことを心得ている者がいる」と、フランスの知識人や共産党の動向を示唆する文章が含まれている。他方で、「アフリカで文化的に最も高い層であるアラブ系住民」というように、イスラム文明の伝統を受け継ぐアラブ系アフリカ人と、それ以外の（原始的とされる）アフリカ人を区別する見方を示しているが、これは当時ヨーロッパで（植民地主義に反対する人々においても）行われていた分類を踏襲したもののと思われる。⁽³¹⁾

また、1927年にアンドレ・ジッドが出版した『コンゴ紀行 Voyage au Congo』の影響も考えられる。これはアフリカのフランス植民地において現地民を搾取する不当な行為がなされているとして告発した本だからである。⁽³²⁾ ちなみにハインリヒはジッドを作家として尊敬しており、彼と近づきになりたいと考えていた。しかしジッドの側はあまりハインリヒを評価していなかったようである。1935年（すでにナチ政権が成立しハインリヒはフランスに亡命していた）、パリで反ファシズムを訴える国際作家大会が開催されたとき、ジッドとハインリヒは同席したが、ジッドはハインリヒに距離を置いていた。⁽³³⁾ 1930年代後半になるとジッドはソ連旅行記を書いてソ連の体制を批判することになる。しかし1934年頃からソ連擁護の姿勢が顕著になっていたハインリヒは、自分の見解を改めることはなかった。⁽³⁴⁾

植民地問題そのものを論じた文章ではないが、ハインリヒがドイツとイタリアの独裁政治を批判して1935年10月に書いた「独裁という危機 Die Krise der Diktatur」には、イタリアのエチオピア侵攻を批判した箇所がある。

一方の独裁者〔ムッソリーニ〕は、百年前なら普通のことで許されもした植民地獲得戦争のようなものを開始した。(…)彼は、アビシニア〔=エチオピア〕から奴隷制を一掃するためだと称している。⁽³⁵⁾

「百年前なら普通のことで許されもした植民地獲得戦争」という認識には、ヨーロッパ列強に

よるアフリカ分割が19世紀末から1912年までの出来事であることを考えるなら問題があるが、いずれにせよ植民地獲得戦争を時代遅れとして批判していることは分かる。

ただし、1930年代初めに書かれたエッセイ「パリのレセプション」にはやや傾向の異なる記述が見られる。この文章は1931年6月にパリで開催された国際作家会議の紹介として書かれたが、会議のレセプションにユベール・リヨテ将軍が登場したことに言及している。リヨテ（1854～1934）はフランス陸軍の軍人で最終的には元帥となったが、フランスの植民地モロッコの統治でも知られ、また1931年（つまり国際作家会議と同時期）に開催されたパリ植民地博覧会に際しても総責任者として重要な役割を果たした。この人物についてハインリヒは次のように書いている。

会議の議長は、最高位の勲章を身につけた非常に高齢の紳士を連れて戻ってきた。これこそがお待ちかねのリヨテ元帥であった。この植民地総督は最近開催されている植民地博覧会のために大きな注目を浴びていたのである。彼のそれ以前の知名度については言うまでもあるまい。老齢で難聴になっていたが、その晩の彼は他の全員と同じく、様々な出し物を黙々と受容していた。その場にいる人々自体が出し物だった。それから晩餐になったとき、私は彼のテーブルに呼ばれた。彼は私に友好的で平和愛好的な言葉をかけながら、私の手をじっと握っていた。しかし彼は実際、活動的な元帥なのである。プレスラウにおけるような軍事的な示威行為は、むしろ兵役を解かれた人間や文民のためだった。⁽³⁶⁾

植民地支配で著名な将軍を、ハインリヒは留保なく偉大な人物として描き出している。そもそも作家の国際会議に軍人が招待されるということ自体が今日からすれば異様に思われるわけだが、「文明化を推進する」という意味で作家の活動と植民地統治を行う軍人の活動が同一線上で捉えられていたということであろうか。ハインリヒのここでの筆致は、老齢の軍人に対する配慮もあろうが、先に引用した批判的精神にあふれた植民地博覧会紹介とはかなり異なっている。

儀礼的な文章だからだろうか。しかし本論文の冒頭で紹介したように、この後1946年に上梓されたメモワール『一時代を閲する』になると、ハインリヒの植民地観は「文明国である英仏の賢明な統治」という、1920年代までのものに逆戻りしてしまっているのである。そしてリヨテ将軍の名は、『一時代を閲する』の中にも二度登場する。最初は「自伝の続き」と題された第7章の「精神的状況」というタイトルの節であり⁽³⁷⁾、内容的には1931年6月に新聞掲載したものと同じである。二度目に出てくるのは第14章「フランス」の冒頭近くで、フランスの植民地統治を賞讃した直後に、リヨテが第一次大戦期に北アフリカ（の植民地）を守り抜いたという意味のことが言われている。⁽³⁸⁾

1931年という時点でのハインリヒの植民地観は、本節の最初に引いた植民地主義への批判を含む文章で代表させても構わないだろう。しかし同時期に発表された老将軍への儀礼的な文章には、それ以前のハインリヒの植民地観も垣間見える。それが1940年代になると、垣間見えた

古い植民地観に全面的に逆戻りしてしまうのである。

なお、直接植民地問題を扱ったものではないが、ヨーロッパ文明こそが普遍的とするハインリヒの思想が、今日的価値観からすれば人種差別的な言い回しを伴って表明された文章がある。1936年11月にドイツと日本の間で日独防共協定（ドイツ語では「Abkommen gegen die Kommunistische Internationale 共産主義インターナショナルに反対する協定」）が結ばれた直後、同年12月1日にフランス・トゥールーズの新聞『急使 La Dépêche』に掲載された「社会的な戦争 Der soziale Krieg」という一文である。冒頭、次のように言われている。

最新のニュースによれば、日本が西欧文明を、協定によって救う義務を負ったという。しかしこれは最新のニュースと言えるだろうか。新しいとすら言えるのだろうか。ムーア人たちは同じようにすでに同じ発注者〔ヒトラー政権〕から託されて西欧文明を救っている〔と称している〕のだ。⁽³⁹⁾

ここで言うムーア人とは、先を読むと分かるのだが、1936年7月に始まっていたスペイン内戦でのフランコ側を指している。フランコ側はむしろスペインの軍人であり、ムーア人ではない。上の文章は要するに、ドイツが日本と協定を結んで組んだのは、ドイツがスペイン内戦でフランコ側を支援していることと同じであり、フランコ側は事実上非ヨーロッパ人も同然だと言っているのである。ハインリヒは先のほうで次のように書いている。

まずフランコなる人物が攻撃を開始した。そしてそれからユンカース〔ドイツの航空機メーカー〕の航空機が〔フランコ側支援のために〕登場した。(…) / (…) スペイン〔の共和派〕はアフリカからの攻撃に対する戦争を行っている。そしてドイツはムーア人を支援している。(…) 残されているのは黄色いアジア人との協定だけで、実際それは〔日独防共協定によって〕実現することになったというわけだ。

このように、ハインリヒはスペイン内戦を規定するに際して、当時スペインの植民地となっていたモロッコを起点にしてスペイン本土に攻め入ったフランコやその協力者を「ムーア人」、フランコ側の軍事行動を「アフリカからの攻撃」と呼び、反フランコの共和派の戦いを「アフリカからの攻撃に対する戦争」と見なしている。「黄色いアジア人」とはむしろ日本人のことである。その少し先では

地中海は古い海であり (…) 忘れがたい体験に満ちた海である。古代ローマ帝国はゲルマン人諸民族が北アフリカにやってきたときに没落したのであった。

と述べて、ヨーロッパの共和派・民主主義勢力は古代ローマ帝国からの文明の継承者なのであり、ヒトラー政権下のドイツは偉大なローマ帝国を滅ぼした野蛮なゲルマン民族と同じだとし

ている。

このように、三十年代初めにはハインリヒの植民地観も或る程度修正されたかに見えたのであるが、冒頭に触れたように、晩年、1940年代半ばに発表されたメモワール、『一時代を閲する』では認識は後退し、初期の植民地観に逆戻りしてしまったのだった。

こうしたハインリヒの植民地観は何に由来するのだろうか。端的に言えば、彼が進歩主義者であり、文明の進歩は単線的に、一つのルートをたどることによってのみ起こるのだと考えていたことに原因があったのである。第一次大戦期にフランスを文明、ドイツを野蛮と見てドイツ批判を行ったように、ハインリヒにとってアジアやアフリカは野蛮な地であり、ヨーロッパによって征服され様々な教えを受けるという位置づけでしかなかったのである。ちなみに「文明化」というフレーズこそ、ヨーロッパがアジアやアフリカを植民地にする際の決まり文句だったことも忘れてはならない。

進歩主義は文明の多様性を認めず、一つの価値観のみを正統とする。ただ一つの価値観は、場合によっては暴力をもってしても押しつけられなくてはならない、それが進歩主義者の極北の思考法なのである。ハインリヒはしたがってスターリニズムによる粛清も支持したし、フランス革命の恐怖政治も支持した。⁽⁴⁰⁾

しかし彼はソ連には一度も行ったことがなかったし、フランスにしてもその中心地パリには居住した経験はなかった。彼が好きだったのはイタリアであり、亡命後の彼はニースという、もともとはイタリア領だった都市に居を構えたのであった。無論と言うべきか、ハインリヒはアジアやアフリカに行ったこともなかった。彼にとって大事なものは理念のみであって、様々な土地の実情ではなかったのである。

ただ、植民地観は彼にとってはあくまでヨーロッパを論じるついでに出てくる問題に過ぎず、中心的な関心ではなかったということは、公正を期すために言っておかねばならない。彼の膨大な量に及ぶエッセイ類は、多くが当時の新聞や雑誌に発表されており、近年ようやく書誌学的な整理のもとに執筆年代順に刊行が進んでいるが⁽⁴¹⁾、これらを読むとそもそも植民地への言及自体が非常に限られている。彼のエッセイは、演劇を含む文学や風俗や時事問題など様々なテーマを包摂しているが、文明論や政治論においてはヨーロッパがほぼ唯一の関心対象なのであって、アジアやアフリカはもとより、アメリカ大陸についてもアメリカ合衆国を例外としてほとんど言及していない。彼にとってはヨーロッパがすべてであった。地球上の文明の先導者であり、第一次大戦後はその位置が揺らいでいるヨーロッパをいかに立て直し、彼がその本質をなすとした崇高な理念の体現としてのヨーロッパを再建することだけが、その思考を支配していた。彼にとって植民地は、ヨーロッパに比べれば副次的で些細な問題に過ぎなかったのである。

第三節 ヨーロッパ人の植民地観を概観する——ハインリヒ・マンの先行者たち

さて、ハインリヒのこうした思考や関心の歪みは、ヨーロッパ知識人の植民地観をたどるなら決して珍しいものではない。ここではその全容に触れることはできないが、代表的な例を若干紹介して、ハインリヒの植民地観が先行するヨーロッパ知識人の言説から見てどのような位置にあるのかを不十分ながらも考察してみたい。

歴史をさかのぼるなら、古代ローマの文人政治家キケロにすでにヨーロッパ中心主義が見られることは第一節で述べたとおりである。しかしここではアメリカ大陸が「発見」されてヨーロッパによる新大陸の植民地化が進められていく時代から始めよう。

最初に時代区分について述べておく。小倉英敬は『「植民地主義論」再考』の中で、オースタハメルに依拠しつつ植民地主義を5段階に区分している。⁽⁴²⁾

「1. 重商主義期、2. 自由主義期、3. 帝国主義期、4. 新植民地主義期、5. グローバル化加速期」という区分である。

1. においては担い手は国家権力で、多くは王室から許可された商人であり、2. においてはこれが産業資本家にとって代わり、3. では金融資本家が前面に出、4. から5. にかけてはグローバル金融資本家へと主体が移行していく。

1. は、植民地からの富の収奪が暴力を伴いながら直接的になされた時期である。

2. は、ヨーロッパの工業化が進み、植民地に工業製品の購買地の役割を押しつけ、現地の手工業を壊滅させた時期である。1. にあっては植民地社会の基本構造は変わらなかったが、2. では「自由貿易」「文明の通商」の名の下に現地の農村共同体は解体されてしまう。

3. になると金融資本支配と工業生産力の急激な増加に伴い、また工業原料を押さえる必要性もあって、植民地獲得競争は激しくなる。こうして1870年代から「帝国主義」の時代を迎えるのである。アフリカの急速な分割もこうした動きの中で起こったことだった。

第二次世界大戦後に植民地は次々と独立したが、旧宗主国は経済・政治・文化をとおして旧植民地支配を維持しようとする。つまり、直接的な植民地主義の時代は終わったかのように見えて、実は「新植民地主義」が成立しているのである。それに続くグローバリゼーションについては言うまでもあるまい。

年代的には各段階が重なる部分もあるが、大まかに分けるなら、1. が16～18世紀、2. が19世紀初頭から半ば過ぎ、3. が19世紀末から20世紀前半、4. が20世紀後半、5. が20世紀末から現代まで、ということになろう。

以下、時代区分によってではなく、国別に植民地言説を概観していく。といっても時代ごとに植民地主義の主役は変わっているのが、国別の見方は時代区分とも無関係ではない。

(一) スペイン

1492年、コロンブスが西インド諸島に到達したことで、ヨーロッパ人のアメリカ大陸への植民や侵攻が開始された。⁽⁴³⁾ したがってアメリカ大陸における初期の植民地主義の主役はスเปน

ンであった。スペインによる入植と支配は、先住民の大量虐殺や搾取を伴っていた。

こうした問題に気づいたのが、スペイン人ラス・カサス（1484～1566）であった。1502年にインディアス（新大陸）に渡り、のべ30年にわたって現地に滞在した彼は、当初は現地支配に関わりを持ち、カトリックの司祭となる。しかし彼に「回心」が訪れる。スペイン人らによる先住民支配は残虐極まりない非道なものであり、キリスト教精神から離反しており、厳しく批判すべきである、むしろキリスト教徒でない先住民の側にこそ、スペイン人を凌駕する人間らしさ、親切さ、寛容の精神が宿っていると彼は見なしたのである。こうしてラス・カサスはスペイン国王にインディアスでの自国民の横暴を告発する活動を開始した。彼が1542年に著した『インディアス破壊を弾劾する簡略なる陳述』は、スペイン人らの非道さを国王に訴える目的で書かれている。この書物は、タイトルに「簡略なる」という形容があるにもかかわらず、いかにスペイン人が獐猛・狡猾・卑怯・残虐・放埒であったかが詳細に綴られている。そもそも、新大陸を「発見」したコロンブスその人にしてからが、そのような行為を率先して行っていたのである。⁽⁴⁴⁾

現代なら、ラス・カサスの告発はヨーロッパ中心主義やヨーロッパ人による収奪的な植民地経営をいち早く見抜いて批判した炯眼の書と捉えるのが普通であろう。しかし彼が生きていた時代には（そしてその後もしばらくは）そうではなかった。本書出版以前からラス・カサスによるスペイン人批判には反論や反批判が多く、本書が出た後もこれを非難する書物が多く上梓されたのである。現地から利益を得ようとする人間や現地でインディオと戦う軍人ばかりではなく、キリスト教の修道士や神学者・法学者（当時の法学はキリスト教神学から完全に分かれてはいない）も含まれていた。

また、インディオは同性愛や人肉食などの不道徳にふける輩だからヨーロッパ人に征服されて当然だと主張する書物も少なくなかった。オビエード、ゴマラ、セプルベダといった論者がその代表格である（彼らの主張も、1990年代に岩波書店から発行された「アンソロジー 新世界の挑戦」で読むことができる）。こうした主張はのちのヨーロッパ人による「植民地化は野蛮人を文明化するため」というイデオロギーへとつながっていく。

そもそも、コロンブスは西インド諸島を「発見」する以前に何をやっていたのだろうか。当時はイスラム勢力に対するキリスト教の「失地回復（レコンキスタ）」が盛んになっていた時期だった。スペインからイスラム勢力が一掃されたのは、コロンブスの西インド諸島到達と同年の1492年であるが、これは偶然ではない。1480年代、キリスト教徒はヨーロッパからイスラム教徒を追い出すにとどまらず、本来キリスト教の支配下でないアフリカにも手を伸ばしており、ポルトガルは軍事的な優位の下にコンゴと「協約」を結び布教を行うと同時に、現地人を強制的に捕獲するなどした。そしてポルトガルのこうした動きにはコロンブスも加わっていたのである。彼の西インド諸島への航海とそこでの行動は、こうした流れの中で見なければならぬ。キリスト教の宣教は、ヨーロッパ内部での「失地回復（レコンキスタ）」の域を越えて、アフリカや新大陸の「征服（コンキスタ）」へと拡大しつつあったのである。⁽⁴⁵⁾

この時期、ラス・カサスと並ぶ重要なスペインの思想家がフランシスコ・デ・ビトリア

(1483? ~1546) であった。パリ大学で神学博士号を取得しサラマンカ大学で20年間に及び神学部正教授を務めた人物である。1539年、ビトリアはキリスト教徒であるヨーロッパ人が新大陸のインディオに対してどのような基準で接するべきかに関する特別講義を行った。「インディオについて」と「戦争の法について」である。その写本は同時代、そして後世にも多く読まれ、彼の弟子たち（いわゆるサラマンカ学派）の活動と相まって多大な影響を与えた。

ビトリアの講義には、当時のキリスト教徒としては最大限の公正さ、そして非キリスト教徒への配慮が見られるが、同時に現実にスペインが行っていた植民地政策への歩み寄りも含まれている。彼は一方ではバルバロ（先住民族）の所有権を認め、彼らに戦争を仕掛けたりその財産を奪ったりすることは許されないとする。しかし宣教を妨害するなら、戦いをもってしても宣教を敢行することができるとする。またバルバロに人肉食など自然に反する習慣があるのであれば、戦争を仕掛けても構わないとも。⁽⁴⁶⁾ ビトリア自身はラス・カサスと異なり新大陸の植民地の実態を自分の目で見ることはなかった。しかし彼の講義を聴いた弟子たちは多くが大西洋を越え、現地でインディオたちがこうむっている悲惨な扱いを目の当たりにして告発すると同時に、しかしスペインによる新たな価値基準に基づいた政策を最終的には容認したのである。⁽⁴⁷⁾

ビトリアが、バルバロに人肉食などの自然に反する行為があれば戦争を仕掛けても構わないと述べているのは示唆的である。先にも触れたように先住民にはそういう悪習があるとの声が上がっていたからこそその言及なのである。しかしそういう声は信頼できたのだろうか。ピーター・ヒュームは、新大陸先住民には温和なアラワクと好戦的で人肉食の習慣を持つカリブがいるという、コロンブスを嚆矢としてパターン化されたヨーロッパ人の先住民族観が存在したことを指摘し、W・アレンズ『人喰いの神話：人類学とカニバリズム』に依拠しつつ、人肉食の報告に信頼のおけるものは一つもないと指摘している。そして、キリスト教の儀式ではパンがキリストの肉、ワインが血とされることを踏まえて、次のように述べている。

十三世紀半ばから十五世紀末にかけて、ヨーロッパでユダヤ教共同体が大量殺戮の対象となった。この大量殺戮はしばしば、ユダヤ人が食人を行っているという告発にしたがって行われた。このパターンは重要である。ある共同体が、その内部統合の根拠としたまさにその行為を外部に投射し、これを告発することによって、共同体の境界が創出されるのである。⁽⁴⁸⁾

先住民族をどのような価値基準で見るか、先住民族にどのような態度で接するべきかという基本的な問題は、コロンブスの西インド諸島到達からあまり時をへずに書かれたラス・カサスとビトリアの書物に、そして彼らを批判した当時の文書に、すでに明瞭な形で表れていたと言えるだろう。

(二) 英国

スペインとポルトガルが先行した植民地獲得合戦には、やがてスペインからの独立戦争をへて海洋国へと飛躍したオランダが加わるが、17世紀半ばの海戦でオランダを疲弊させた英国（1707年にイングランドとスコットランドが合同してグレートブリテンとなるわけだが、ここではそれ以前のイングランドも含めてこのように呼ぶ）が強国として登場し、やがてフランスの挑戦をも退け、世界最大の植民地帝国を形成する。英国の場合、言説面ではどのような特徴が見られたのだろうか。

まず、トマス・モア（1478～1535）の有名な『ユートピア』である。今日に至るまで使われているユートピアという言葉のもとになった作品でもあるが、ここでモアはユートピアに住む人間の植民について以下のように書いている。

ユートピア全島にわたって多くの人口過剰をきたすような場合には、各都市から一定の市民を選んで、これを、人は住んでいるが荒れ果てた土地の多い、近くの陸地に送り、自分たちの法律の下に一つの新しい町を建設させる。もちろん、もしこれらの土地の住民が一緒に生活したいと申し込んでくれば受け入れる。(…)これと反対にもし土地の住民が彼らとともに住むことを拒み、彼らの法律に従うことを拒むようなことがあれば、彼らはその土地を自らのものとして定め、その領域からその住民をすべておいはらってしまう。もしそのとき、住民が反抗し暴動を起こせば、彼らは直ちに住民に対して戦いを開く。なぜなら、ある国の国民がその土地をただ無意味に遊ばせているくせに、自然の法則にしたがってその土地によって生活しようとする他の国民にそれを拒むことは、これこそ戦争のもっとも正当な理由と彼らは考えるからである。⁽⁴⁹⁾

『ユートピア』は1516年に出版された。コロンブスの西インド諸島到達が1492年、アメリカの語源となったアメリゴ・ヴェスプッチがアメリカ大陸探検の模様を記した『四航海記』のラテン語訳が出たのが1507年であった。『ユートピア』の出版はそうした時代の流れの中で行われたのであり、前項で取り上げたラス・カサスやビトリアの出版・講義が1540年前後になされていることを考えるなら、『ユートピア』こそが新大陸へと向かうヨーロッパ人の基本哲学を、最も早い時期に示した書物だったとも言える。

中南米ではスペインに先じられた英国が北米大陸への植民を推進するよう論陣を張った代表的な文筆家に、リチャード・ハクルート（1553～1616）がいる。彼は1584年、『西方植民論』をエリザベス一世に献上したが、その第11章でラス・カサスの書物を引用しつつ、スペインの残虐性を批判した。しかし彼には、ラス・カサスの批判が自国にも当てはまることになるとは思ってもよらなかったようである。⁽⁵⁰⁾

また、奴隷制度廃止ではヨーロッパの先陣を切った英国だが（奴隷貿易禁止法が1807年、奴隷制度廃止法が1833年）、著名な言論人は必ずしもそれに賛成してはいなかった。哲学者トマス・ホッブス（1588～1679）は奴隷制を「権力の論理の不可避な一部」として容認し、哲学者

ジョン・ロック（1632～1704）も言説面では奴隷制を恥すべきものとしながら、王立アフリカ会社への出資者として現実には奴隷制を認めていたのである。⁽⁵¹⁾

英国人の植民地言説を批判的に検討した人物として知られるのが、トリニダード・トバゴの歴史家であり初代首相をも務めたエリック・ウィリアムズ（1911～1981）である。以下、その『英国の歴史家たちと西インド諸島 British Historians and the West Indies』（1964年）に依拠して英国知識人の植民地観をまとめてみよう。⁽⁵²⁾

ウィリアムズはまず、ヨーロッパに富をもたらした（16世紀に始まる初期の）植民地貿易の基本的なシステムがスペインによって構築され、アンシャン・レジーム下のフランスに模倣され、さらに英国にも受け継がれたことを指摘する。その上で、賞讃すべき人物として著名な経済学者アダム・スミス（1723～1790）の名を挙げる。『道徳感情論』（1759年）と『諸国民の富』（1776年）の中で奴隷制や宗主国・植民地間の不公平な関係を批判したスミスこそ、19世紀の英国歴史家とは一線を画する見識の主なのであった。同じく、奴隷解放運動に尽力したトマス・クラクソン（1760～1846）も賞讃されている。これに対してデイヴィッド・ヒューム（1711～1776）やベンジャミン・フランクリン（1705～1790）は黒人に対して差別的な言説を弄していたとして批判されている。

19世紀の半ば、すなわち1830年から1870年にかけての時期、西インド諸島は（そしてインドを除く北米とオセアニアの植民地も）英国にとっては経済的な利益には直結しなくなっていたが、その頃の歴史家の特質としては、チュートン民族礼讃（したがって英国と並んでプロイセンも賞讃される）、狂信的な愛国主義、そして「劣等人種」への蔑視が挙げられる。英国国教会の主教でありオクスフォード大学教授でもあったウィリアムズ・スタップズ（1825～1901）は次のように述べているという。

近代ヨーロッパの自由は、ギリシャ・ローマの自由ではなく、チュートン諸国家の古来の自由による基礎を持つ。

ドイツ人と英国人は、いずれも非侵略的な国民である。秩序と平和は、両国民にとっては、現在においてもこれまでも常に征服よりはるかに重要であると考えられている。両国民は共に、植民地を確立することに成功し、強烈な愛国心に燃え、自由のために独立を求める気概に満ち満ちている。このこと以上に、英独両国民とフランス国民との間の絶えざる敵対関係の原因を解く鍵を見つける必要があるだろうか。⁽⁵³⁾

ハインリヒ・マンが読んだら卒倒しそうな認識ではある。

「劣等人種」への蔑視に関しては、フランスのゴビノーが1854年に出版した『人種不平等論』の影響が大きいという。ケンブリッジ大学教授を務めたジョン・アクトン（1834～1902）は、白人と黒人の差異を強調するのみならず、ベルシャ人、ギリシャ人、ローマ人、チュートン人だけが、歴史や進歩の創造者であるとし、ケルト人、ヒンズー人、スラヴ人を劣った民族だと決

めつけている。詩人アルフレッド・テニソン（1809～1892）には「ヨーロッパの五十年は、シナが千年にもまさるなり」という詩句がある。⁽⁵⁴⁾ エジンバラ大学長も務めたとはいえ、学者というよりは文筆家として活動し『英雄論』で知られたトマス・カーライル（1795～1881）が露骨な黒人差別の言説を打ち出していたのはともかくとして、純然たる学者だったはずのジョン・アクトンが奴隷制を弁護し、「奴隷制は間接的にデモクラシーが解体することに歯止めをかけている」と述べているのは、今日からすれば驚くべき見解であろう。⁽⁵⁵⁾

1865年に起こったジャマイカ反乱についてウィリアムズは詳細に分析しているが、ここでは省く。本論文にとって重要なのは、この事件で現地人に対して暴力的に対処した総督エドワード・ジョン・エアを擁護した英国知識層には文学者が多かったという指摘である。カーライル、ラスキン、テニソン、ディケンズ、チャールズ・キングズリといった有名作家や詩人がそこには含まれていた。これに対して、自然科学者は、一部はエアを支持したが、多数は批判に回った。その中でトマス・ハックスリー（1825～1895）の名は今日でも知られていよう。歴史や経済の大学教授も多くがエア批判派であった。大学人ではなかったが哲学者ジョン・スチュアート・ミル（1806～1873）もそこに含まれる。ウィリアムズは総括して、「英国社会の上層部でエアを支持した人々を見るならば、最後まで奴隷解放に反対して闘った人々の名前が思い出される。1833年の時点での奴隷制擁護者たちと、1866年のエア支持者たちとの間にはいちじるしい類似点が見られる」と述べている。⁽⁵⁶⁾

ジャマイカ反乱は、アフリカ分割以前の事件である。しかしアフリカ分割が行われた後の二十世紀初頭になっても、英国では著名な文学者が帝国主義の音頭をとっていた。ラドヤード・キプリングが1903年に作った有名な詩をウィリアムズは引用している。なお下記訳文で「白人の重荷」となっている箇所の内容は White Man's Burden であり、「白人の責務」と訳されることも多い。

白人の重荷を負え
汝の育てし最良の子を送り出せ
(…)
騒々しい野蛮未開の人たちに
汝が新たに捕獲せし鈍重な人たちや
半ば悪魔、半ば子供のような人たちに
力を捧げるように⁽⁵⁷⁾

しかし歴史学の教授も同じことであった。19世紀末から第一次世界大戦勃発までの時期になっても、オクスフォードやケンブリッジの歴史学教授たちは、植民地の正当化、奨励、擁護、弁明に走っていた。詳細は省くが、要するに英国の植民地統治はすばらしい、英国人が現地人を指導するのは当然のことであるとする思考が支配的だったのである。

第一次世界大戦後はどうか。この時期になると英国の国際的な地位には陰りが見え、代わっ

てアメリカ合衆国の国際的地位が格段に向上する。国内の実態はともかくとして、米国政治家の反帝国主義的な発言は世界中から注目を浴びた。けれどもこの期に及んでも英国の歴史学教授の植民地観には変化がなかったこと、奴隷制廃止の賞揚によって英国の高潔ぶりを強調するきらいがあることをウィリアムズは批判し、さらに、西欧以外の文明にも広く視線を向けて新しい歴史観を提唱したとされるアーノルド・トインビー（1889～1975）をも、黒人の文明を一顧だにしていなかったとして問題視している。⁽⁵⁸⁾

第二次世界大戦以降の言説状況についてもウィリアムズは触れているが、この部分は彼の学者としての主張とそれに対する英国系学者の批判が絡んでおりかなり細かい記述がなされているので、ここでは省略する。ただ、彼が紹介している一つのエピソードを引いておこう。ウィリアムズが著書『資本主義と奴隷制』を1944年に出版したとき、米国では賞讃されたが、英国では1964年まで出版できなかった。1939年段階で英国の著名な左翼系出版社に打診したところ、「そのような本を出すのはまっぴら御免だ。それは英国の伝統に反している！」と言われたそうである。⁽⁵⁹⁾

史上最大の植民地帝国を築いた英国については日本でも文献が多く出ており、植民地言説もそれなりに取り上げられているが、ここではそれらに逐一触れることはできない。しかし木畑洋一によれば、20世紀末に発行された『オクスフォード・英帝国史』全五巻は、帝国についてのポジティブな記憶を構築する方向性を有していたし、その少し前に出た『ケンブリッジ・絵入り英帝国史』一卷本は、全体的に帝国への肯定的な姿勢の中で、唯一インド人史家による「インドにおける英国支配：その評価」という章のみが批判に満ちており、全体の中で異質な印象を与えたという。⁽⁶⁰⁾ ウィリアムズがオクスフォードやケンブリッジの歴史学教授を批判してから30年以上をへてもなお、英国歴史学者の植民地主義への姿勢に変化はなかったということだろうか。ただし、木畑洋一によると英国内では「自由貿易帝国主義」時代、つまり19世紀になってからリチャード・コブデン（1804～1865）やジョン・ブライト（1811～1889）などそれなりに植民地主義批判を唱える人物はいたのだが、こういう声力が持つようになったのは19世紀末になってからだったという。⁽⁶¹⁾ コブデンもブライトも政治家であったことをふまえるなら、歴史学者と政治家の姿勢の相違が浮かび上がってくると言えるのかも知れない。

英国の項を終えるにあたって、時代は少しさかのぼるが、著名な例をもう一つ挙げておこう。といっても植民地主義擁護ではなく、批判である。

ジョナサン・スウィフト（1667～1745）は『ガリヴァー旅行記 Gulliver's Travels』の第4部「フウイヌム国渡航記」の中で、語り手、つまりガリヴァーにヨーロッパの植民地主義を批判させている。

ここで一つ白状しておかなければならないことがある。それは、私もイギリスの臣民 (a subject of England) であるからには臣民らしく、帰国するや否やまず国務大臣に当てて覚書を提出しておくべきであった、と或る人が私に耳打ちしてくれたことである。いかなる国土であれ、イギリス臣民が発見したものであれば、イギリス国王に帰属する、というのが

その人の言い分であった。しかし、私がここで扱っているいろんな国に対する征服が、たとえばフェルディナンド・コルテスが行った素っ裸のアメ리카土着民に対する征服のように、易しいものであるかどうか、私としては疑っている。(…)

しかし、新しい国土を私が発見したからといって、国王陛下の領土の拡張にすぐ資するつもりが私になかったのには、もう一つの理由があった。正直に言って、こういった場合、果たして君主たちが分配的正義を実際に行うかどうかについて、私は若干の不安を感じていたのである。たとえば、海賊の一隊が暴風雨にあつて海上をあてどなく漂流していたとする。やがて一人の少年がトップマストの上から陸地を発見する。よし、掠奪だ、とばかり一同上陸する。ところがそこに現れたのが罪のない土着民たちで、到れり尽せりの歓待をしてくれる。海賊たちの方はその土地に勝手に新しい名前をつけ、国王の名代として正式な領有権を宣言し、その証拠に朽ち果てた板きれ一枚か石ころ一つをおったてる。そして、なんと土着民を二、三十人殺し、なおその上見本として一組の男女を力づくで引っ捉えて帰国し、今までの犯罪の赦免状を手に入れる。ざっとこんな具合にして、まさに「神権」によってえられた新領土が確立されてゆくというわけだ。早速機会あり次第、艦船が派遣され、土着民たちは追い払われるか皆殺しにされる。彼らの王様たちは、金の隠し場所の白状を迫られ、あげくの果ては拷問にかけられる。どんな非人間的で貪欲な振舞いでも、すべて公然と許される。大地は、原住民の流す血で一面に染まる。かかる敬虔な遠征に参加して、ひたすら虐殺に専念する言語道断な一隊、これこそ、偶像を崇拜する野蛮な土着民たちを改宗させ、文明に浴させるために派遣された「現代の移住民」の偽らざる姿なのだ。

しかし、今言ったことがけっしてイギリス国民 (the British nation) のことをさしているものでないことは、ここで断っておきたい。けだし、わが国民は、植民地問題に関しては全世界の模範と言って過言ではない、と思うからである。

[以下、いかにイギリスの植民地政策が高潔かが述べられている。]⁽⁶²⁾

ここでスウィフトがヨーロッパ植民地主義に対して (慎重な筆致ながら) 批判を行っているのは、彼がアイルランドの生まれであり、つまり隣の英国から収奪を受ける土地の出身だったことを抜きにしては考えられないだろう。スペインやポルトガルに比べて国力整備が遅れていた英国は、新大陸に進出する前段階として17世紀前半にアイルランドに植民を行ったからである。そしてこれが北米大陸への植民拡大につながっていった。⁽⁶³⁾

『ガリヴァー旅行記』の成立は1726年、『ユートピア』の二百年あまり後のことだった。すでに北米大陸での英国植民が拡大してただけでなく、英国東インド会社のインド進出から百年ほどが経過しており、1757年、ブラッシーの戦いで英国東インド会社の軍隊はベンガル太守軍とフランス東インド会社の連合軍を破り、それ以降、急速に英国によるインドの植民地化が進んでいくのである。そうした時期に書かれた『ガリヴァー旅行記』は、言うならば反時代的な書物だったとも見ることができよう。

(三) フランス

フランスは英国同様、スペイン・ポルトガルに比べると新大陸での植民地獲得では遅れをとった。また、18世紀には北米大陸やインドでの植民地獲得で英国と激しく争ったものの、最終的には敗北して、カリブ海の植民地を別にすれば新大陸から手を引くことになった。フランスが再び植民地大国として浮上するのは、1830年にアルジェリア侵攻が始まって、アフリカが新たな植民地獲得のターゲットとなってからである。さらにアジアのインドシナにも植民地を獲得して、英国に次ぐ植民地大国となった。

言説面ではどうか。海原峻によれば、16世紀ヨーロッパ人の反植民地主義思想には二つの流れがあるという。ひとつはロンサル、ラブレ、モンテーニュらの人文主義者(ユマニスト)、もう一つはキリスト教神学者・聖職者である。⁽⁶⁴⁾すでに触れたスペインのラス・カサスやビトリアは後者に属する。

モンテーニュは、有名な『エッセ』の中で、インディオには食人の習慣があるとする言説に触れて、ヨーロッパ人はそれに劣らず残酷な刑を行ってきたと述べてインディオを特に残虐な種族とする見方に疑問を呈している。⁽⁶⁵⁾また、スペインが南米で行った残虐な戦争を批判している箇所もある。⁽⁶⁶⁾もっとも、食人への言及では、出典が不明瞭なこと、先住民族への固定観念を強めたことなどのマイナス面も指摘されている。⁽⁶⁷⁾いずれにせよ、1570年代から80年代にかけて書かれた『エッセ』でのスペイン批判・先住民族擁護は、南米における植民政策のマイナス面を人文主義者が明瞭に述べたものとして注目に値する。

時代は飛んで、18世紀啓蒙主義時代のフランスである。啓蒙主義の思想家は、むろんと云うべきか、奴隷制を否定していた。例えば代表的な社会思想家ジャン＝ジャック・ルソー(1712～1778)は『社会契約論』(1762年)の中で奴隷制度を正面切って非難している。しかし近年、ルソーは当時ヨーロッパに多く見られた黒人奴隷については言及を避けていた、という指摘がなされている。つまり、一般論としての奴隷制を否定はしても、現実の黒人奴隷には沈黙していた、つまり事実上(人種差別的な意識により)容認していたのではないかというのである。⁽⁶⁸⁾最近はこのように、知識人が何を言ったかばかりでなく、何を言わなかったかにも光を当てる作業が進んでいる。⁽⁶⁹⁾

啓蒙思想家の代表格であるドゥニ・ディドロ(1713～1784)は、『ブーガンヴィル航海記補遺』(1772年)でヨーロッパ列強の身勝手な領土拡大を批判した。⁽⁷⁰⁾フランス啓蒙思想の精華とも言うべき『百科全書』は、黒人奴隷を「宗教、道徳、自然法、一切の自然の権利に反する商取引」とした(1780年)。⁽⁷¹⁾と同時に、『百科全書』には植民地は本国の利益のためにあるという思想が見られるという指摘もある。つまり植民地領有は悪ではないという認識なのである。⁽⁷²⁾

ともあれ、フランス革命前後のフランスでは植民地主義や黒人奴隷制への批判が高まった。とはいえ、革命ですんなり奴隷制廃止が決まったわけではない。ダントンがいったん奴隷制を廃止したが、ナポレオンが権力を握ると復活するなど、事情は二転三転する。奴隷制はその後法制面では廃止されても、王政復古時代は事実上維持された。ただし、この時期にフランスで

反植民地の思想が強かったのは、1763年のパリ条約や1783年のアメリカ合衆国独立により、フランスの植民地がほとんど消失してしまったからでもあった。相変わらず植民地大国である宿敵・英国を批判するという動機も、フランスの植民地主義批判には含まれていた。

しかし、19世紀になると局面は一変する。フランスは1830年にアルジェリア侵略を開始し、新たに植民地主義国家となっていく。この地は16世紀以来オスマン・トルコに支配されていた。フランスのアルジェリア派兵は、北アフリカのアラブ人をトルコの軛から解放するという名目でなされた。またアルジェリアには奴隷制が存在したので、それをやめさせるという口実も存在した。ここに「文明化」という言葉が登場する。つまり、奴隷制廃止と植民地領有はいずれも「文明化」のためなのであって、当時としてはいささかも矛盾していないと考えられたのである。⁽⁷³⁾

これに合わせるかのように登場したのが、ロマン主義の文学であった。王党派であったシャトブリアンは、文学者であると同時に政治家（外相も務めた）であったが、フランスのアルジェリア征服当時に行った文章には、帝国主義の時代精神を示すいくつかの要素が見られるという。ヨーロッパの科学技術、文明の尖兵たるキリスト教、自由・進歩という先進的な理念などである。またキリスト教宣教師の植民地での活動も活発化し、政府はそれを支援した。⁽⁷⁴⁾

本論文の第一節では、文豪ヴィクトル・ユゴーが1879年に奴隷制廃止記念の祝宴に際して、「南へ行きたまえ！ アフリカには歴史がない」と植民地主義をけしかける発言を行っていた事実を紹介したが、ユゴーこそ当時の「奴隷制解放と植民地主義はどちらも文明化」という思想を代表した文人だった。ユゴーはアルジェリア総督に任命されたばかりのビュジョー将軍（アルジェリア征服戦争の中心人物。残虐な行為を多く行ったとされる）に寄せて、「この地を新たに征服したのは、喜ばしく偉大なことです。まさに文明が野蛮に抗して進んでいるのです。蒙昧な人々に、開明的な国民が手を差し延べるのです。私たちの使命は達成されました。私は勝利の歌を歌うばかりです」（1841年）と述べ、アルジェリア征服を正当化していた。ユゴーはその6年後の1847年にもこう書いている。「アフリカは野蛮な状態にあります。私はそれを承知している。しかし政治責任者に忘れてほしくないのは、アフリカには野蛮に染まるために行くのではなく、それを解体しに行くということです。」⁽⁷⁵⁾

作家や学者がこうした見解を述べることは当時珍しくなかった。モーパッサンは、アフリカ人が耕すとその田畑の畝はヨーロッパ人が耕すものとは別物になってしまう、だからヨーロッパ人の所有になるのが妥当だと述べる。エルネスト・ルナンは「中国人は労働者の人種、黒人は大地で働く人種、ヨーロッパ人は主人と兵士の人種」と述べている。⁽⁷⁶⁾

こうした人種差別的な識見に裏打ちされた「文明の伝播」こそが、ヨーロッパ列強のアフリカ・アジア植民地化を正当化するキーワードであった。右翼や王党派だけでなく、第三共和制ではむしろ左翼が率先して植民地拡大に走ったこと、当時二度首相を務めたジュール・フェリーがその代表格であったことにはすでに触れた。フランスの社会党は植民地主義に関しては1920年代になっても曖昧な態度をとっており、明快に植民地主義批判を行っていたフランス共産党とは一線を画していた。ただし共産党の植民地主義への態度はソ連の主張に沿っており、

ソ連が対ドイツ政策を考慮して（ドイツを押さえるためには英仏など植民地大国を支持するのが得策との思惑から）植民地主義批判を抑制するようになった1930年代半ばからはヨーロッパ各国の共産党も態度を変化させたという。⁽⁷⁷⁾ こうした流れの中では、第二節で触れたパリ植民地博覧会を契機とする植民地主義批判や、ジッドによる植民地経営批判も、一般の植民地観を一変させることはできなかった。

フランスでは左派がむしろ植民地主義を擁護するという現象は、第二次世界大戦後もアルジェリア独立運動に際して見られ、20世紀末になってもなおそうした傾向が続いている。⁽⁷⁸⁾

（四）ドイツ

さて、ハインリヒ・マンの生まれ育ったドイツについてはどうであろうか。

ドイツは19世紀後半になってようやく統一国家として成立したため（普仏戦争でのプロイセン勝利直後の1871年）、植民地獲得でも英仏に比べると大幅に遅れをとった。しかしヨーロッパ知識人にとって普遍的な問題であった奴隷制の是非については、それ以前から議論がなされていた。本論文の第一節で指摘したように、英国が奴隷制を廃止したのは人道のためではないとゲーテ（1749～1832）が1829年に発言しているのはその一例である。また最近米国のヘーゲル学者バック＝モースが主張しているところでは、哲学者ヘーゲル（1770～1831）は1791年に始まるいわゆるハイチ革命（フランス革命に影響されて当時フランスの植民地でサン＝ドマングと呼ばれていたハイチで黒人奴隷が反乱を起こし、最終的には世界初の黒人共和国を樹立した）について知っていながら、そのことを明示することなく、しかしその衝撃に影響されて、奴隷制の漸進的な廃止という保守的な主張や、サハラ以南のアフリカを差別的に見る観点を打ち出したのだという。ちなみにヘーゲルの情報源となった雑誌は、ゲーテ、シラー、クロップシュトック、シェリングといった当時のドイツ文化人にも多く読まれていた。⁽⁷⁹⁾ 同時代の作家ハインリヒ・フォン・クライスト（1777～1811）に『サン・ドマングの婚約』（1811年）というハイチ革命に材料を得た短篇があるのも、当時のドイツ文化人がハイチ革命を大事件として認識していたことの証拠であろう。

植民地に関して言えば、1884年のベルリン会議によりアフリカ分割が大幅に進行した時点で、ドイツはようやくアフリカに植民地を得たのである。（本論文ではバルト海沿岸——現在のポーランドからバルト三国にかけての地域——でのドイツ人の植民・開拓については触れない。）英仏と比較してドイツにおける植民地問題は、支配期間の短さに加えて、本国の内政・外交上に占める重要度もはるかに低かった。⁽⁸⁰⁾

したがって植民地問題がドイツ内で大きく取り上げられるようになるのも19世紀末からであり、主として社会主義者たちによってであったが、大きな流れを言うなら、当初は植民地政策に反対の立場をとっていたものの、やがて容認・肯定へと転じていったのである。

1871年のドイツ帝国成立以前から活動しドイツ社民党の創設にも関わった社会主義者アウグスト・ベーベル（1840～1913）やヴィルヘルム・リープクネヒト（1826～1900：第一次大戦直後にドイツ共産党創立に関わって惨殺されたカール・リープクネヒトの父）は、植民地獲得や

帝国主義的政策を資本主義延命の手段だとして批判していた。植民地への蒸留酒の輸出がドイツ企業の利益になる反面、現地人を墮落させ借金を負わせる弊害を生んでいることを問題視し、また土地の接収や強制労働、現地人の弾圧なども批判した。19世紀末にあつては、こうした具体的な植民地スキャンダルを資本主義ゆえの悪として非難する姿勢が、ドイツの社会主義者にははっきりと見られたのである。

しかしこれに反対する動きもあった。社会主義者ながら修正主義で知られたベルンシュタイン（1850～1932）は、植民地の現地人は自治能力が低く経済的にも自立できないからという理由で、植民地も経済発展を遂げるためには資本主義の一段階を経ることが必要であり、私企業による搾取を防ぎさえすれば現地人＝プロレタリアートの労働条件は向上し、宗主国の労働者との連帯も可能になると説いた。これは現地人をヨーロッパ人と平等視しているからまだしもだが、白人プロレタリアートのために現地人が犠牲になってもやむを得ないとする社民党員も存在したという。同時に、衛生環境の整備や開発事業の展開、自治能力の涵養といった目的を達成するためには植民地支配は文明国の権利・義務だとする論調も拡がっていった。こうした論調はむろん英仏にも見られたものである。

植民地主義に批判的なドイツ社民党の政策が大きく変わったのは、1907年の選挙においてだった。ここで植民地主義を批判し内政を重視した同党は惨敗を喫し、植民地を推進する政策が労働者を含め国民からの支持を得やすいことが明瞭になった。民主主義はナショナリズムを生み、それが植民地主義支持につながるという、やはり英仏にも見られた構図がドイツでも繰り返されたと言える。

1907年9月に行われた第二インターナショナル・シュトゥットガルト大会では、植民地主義についてオランダやドイツの社会主義者から肯定する声が上がった。被支配国の代表らの主張によって「社会主義的な」植民地政策を肯定する決議は阻止されたが、この大会が転機となって、植民地主義そのものを批判するのではなく、その方法に限定して批判を行う傾向が強まった。

またヨーロッパ人社会主義者は現地での実態調査をほとんど行っておらず、その議論は理論倒れになりがちであり、植民地主義を近代化の一過程と見て肯定的に見るにせよ、資本主義の支配形態として否定的に見るにせよ、植民地放棄や独立を即時求めるような具体的な動きにはつながらず、結果的に植民地主義を追認する形となったのである。⁽⁸¹⁾

第一次世界大戦で敗北したドイツは植民地を失った。しかしそこに登場したのは植民地修正主義であった。第一次大戦敗北後のヴァイマル共和国期ドイツにおいて修正主義（Revisionismus）とは、ヴェルサイユ体制を否定して第一次大戦以前の状態に回帰しようとする動きのことであるが、植民地観については、英仏と異なりドイツの植民地政策は人道的で現地人のことを第一にと考えていたとする、必ずしも事実には合致しない見方が登場するようになったのである。⁽⁸²⁾

第二次世界大戦以降になると、西ドイツでは何と言ってもナチズムに関する問題が負の遺産として取り上げられ、植民地に関する問題はしばらくは忘れられていた。また、英仏と異なり

第一次大戦終了と同時に植民地を持たなくなった（西）ドイツは、旧宗主国とアフリカの間を取り持つ仲介者という役割を持つとすらされたのである。⁽⁸³⁾

1968年の学生叛乱においてようやくドイツの植民地問題も俎上に載せられるようになった。当時の左翼を支配していた帝国主義批判の枠内という限界もあったものの、「ヘレロ・ナマ戦争」の実態究明などがなされるようになる。⁽⁸⁴⁾ 20世紀末になってドイツ再統一とソ連崩壊により、第二次大戦後の世界を規定していた東西対立というイデオロギーの枠組が消滅した頃になって、旧植民地側から植民地支配の残虐性や不法性が訴えられるようになり、これも契機となって再統一されたドイツでも植民地問題を本格的に検討する動きが強くなっていったのである。

そういうわけでドイツの植民地問題については本国でも研究が遅れていたため、日本でも21世紀に入ってからようやく研究書が刊行されるようになった。ドイツの植民地支配の実態については、栗原久定『ドイツ植民地研究』（パブリブ、2018年）が出ており、またその「総論」での概略的な記述でおおよその実情を知ることができる。

（五）ハインリヒ・マンの植民地観の位置づけと今後の課題

以上、ヨーロッパにおける知識人たちの植民地観を概観したが、ハインリヒの植民地観はその中でどのような位置にあるのか、改めて考えてみたい。

20世紀前半にドイツの知識人として活動したハインリヒは、フランスを模範と仰ぐことで知識人としての地歩を固めた。若い時分には反ユダヤ主義に走ったり、フランス文化でも非合理主義的な側面に魅惑されたりした彼だったが、三十代半ばを迎えた1905年頃からフランス革命を人類の進歩に対する一大貢献と見なす進歩主義史観をとるようになる。⁽⁸⁵⁾ こうして、自国ドイツに対してはその権威主義や近代化の遅れを指摘し、フランスを実態によってではなく観念によって理想化する知識人ハインリヒ・マンが誕生した。第一次世界大戦で英仏側を支持するハインリヒの姿勢もその結果として生じたのである。

ハインリヒが英仏の植民地主義を擁護したのも、その流れの中でのことであった。英仏はドイツに対して万事に進歩的で文明的である以上、植民地に関する政策においてもそうでなければならないという論理的要請が、ハインリヒを縛っていたのである。また、当時のフランスには、左派が率先して植民地主義を擁護するという風潮が存在した。植民地主義はギリシャ・ローマ以来の文明を継承しているヨーロッパ先進国が野蛮な地域を教導するために存在するという理論を、ハインリヒはそのまま無批判的に受け入れていたと言える。ただし同じ植民地大国でも英国の場合、上で見たようにフランスに対する対抗意識から、むしろドイツ（プロイセン）に民族的同質性を見る歴史家も存在したわけだが、おそらくハインリヒはそうした言説を知りもしなかっただろう。

植民地主義では英仏に遅れをとったドイツでは、社会主義者たちによる植民地主義批判がそれなりに行われていた。しかしハインリヒが彼らから影響を受けた様子はない。フランス革命を讃美したハインリヒではあったが、平等や自由を理念として賞讃することはあっても、特に

1920年代までは経済の実態に踏み込む姿勢は薄かった。経済に触れることを、むしろ物質優先主義だとして忌避する傾向すらあった。

1931年にパリで植民地博覧会が行われたとき、フランス知識人に植民地主義や植民地経営に対する批判が強まった。またアンドレ・ジッドの『コンゴ紀行』（1927年）がフランスの植民地経営を槍玉に挙げていた。そのため、ハインリヒも植民地主義批判的な視点を取り込むが、1940年代になるとまた元の見方に逆戻りしてしまう。そこには、ナチ批判を続行するためには、ナチ・ドイツと対立している連合国側の正義を強調しなければという論理的な要請も働いていたであろう。しかし、そもそも植民地問題がハインリヒにとって大きな関心ではなかったこともある。彼にとって大切なのはあくまでヨーロッパだったのである。また彼が万事に理念優先で、現実を実地に観察して物事を考えるタイプの人間ではなかったことはすでに述べたとおりである。彼の植民地観は、そうした中で形成されたのだった。それはまた、植民地主義がどれほど重要な問題であるかを、彼が把握していなかったという事実にもつながっている。そうした限界はハインリヒに限ったことではなかったし、ドイツ知識人に限ったことでもなかった。最後に、現代英国の歴史学者グレゴリー・クレイズの指摘を引用して、植民地主義に関する実態面と言説面での研究がさらに進捗することを期待しつつ締めくくりとしたい。

敵意ある学者たちは何世代にもわたって、この〔ユートピア主義がもたらした〕災難を社会主義と、そして特に中央集権の計画経済と同一視してきた。しかし、ここで問われるのは平衡感覚の有無である。フランスの恐怖政治で亡くなった五万五千人の死者を、スターリンに殺された二千万人あまりの死者を、毛沢東の犠牲になった推計七千万人の死者を悼みこそすれ、十九世紀のヨーロッパ帝国主義のもとで亡くなった一億人あまりの人々を、また南北アメリカの征服過程で亡くなったほぼ同数の人々を思い出すことはいっそう稀である。

巨大なヨーロッパの帝国は、その企図者にとっての「ユートピア」であった。汚れた異教徒の野蛮人に広く秩序を強要できる、国際的、個人的栄光という贅沢な夢であった。しかし、同時にこれらの帝国は、そのような暴力的で急速な「文明化」を望まなかった人々にとってのディストピアでもあったのだ。大量虐殺や極端な残虐性は様々な形を取るもので、すべてを社会主義的「ユートピア」自体の濫用に帰することなどできようはずもない。⁽⁸⁶⁾

注

- (1) 三浦淳：ハインリヒ・マンの『一時代を閲する ―知識人の末路とユートピア主義―』、日本独文学会（編）『ドイツ文学 106』、2001年春、60ページ。なお、文中で引用されているハインリヒの発言の出典は以下のとおり。

Heinrich Mann: Gesammelte Werke Bd.24 "Ein Zeitalter wird besichtigt" Berlin (Aufbau-Verlag) 2.Auflage 1982 S.101, 374
- (2) Wolfgang Klein und Volker Riedel: Zur Edition des Bandes 2 der Kritischen Gesamtausgabe der *Essays und Publizistik* Heinrich Manns (Oktober 1904 – Oktober 1918). Buchvorstellung zur Jahrestagung der Heinrich Mann-Gesellschaft, 24. März 2012, In: Heinrich Mann-Jahrbuch 30/2012, Lübeck 2013, S.235
- (3) Manfred Flügge: Traumland und Zuflucht. Heinrich Mann und Frankreich. Berlin (Insel Verlag) 2013 S.66, 96
- (4) Heinrich Mann: Essays und Publizistik. Kritische Gesamtausgabe. Bd.2 1904-1918. Bielefeld (Aisthesis Verlag) 2012 S.212-214
初出: Europäische Zeitung. Berlin/München 23.Okt.1916
単行本初出: Heinrich Mann: Macht und Mensch. München (Kurt Wolff) 1919
- (5) Heinrich Mann: Essays und Publizistik Bd.2 1904-1918. S.679
- (6) 海原峻『ヨーロッパがみた日本・アジア・アフリカ』、梨の木舎、1998年、125～126ページ。バンセル、ブランシャール、ヴェルジェス（平野千果子・菊池恵介訳）『植民地共和国フランス』、岩波書店、2011年、121～127ページ。
- (7) Thomas Mann: Gesammelte Werke in 13 Bänden. Frankfurt am Main (S. Fischer Verlag) 1974, Bd. XII, S.294
邦訳: トーマス・マン（前田敬作・山口知三訳）『非政治的人間の考察（中）』、筑摩書房、1969年、118～119ページ。
なお、本論文では『非政治的人間の考察』からの引用は上記筑摩書房刊の邦訳を借用する。ただしごく一部の訳語、及び漢字の使い方に変更を加えている。
- (8) Thomas Mann, a.a.O. S.355
邦訳: トーマス・マン、前掲書、215ページ。
- (9) Thomas Mann: Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Frankfurt am Main (S. Fischer Verlag) Bd.13-2 (2009), S.454
- (10) Thomas Mann: Gesammelte Werke in 13 Bänden. Bd. XII, S.51f.
邦訳: トーマス・マン（前田敬作・山口知三訳）『非政治的人間の考察（上）』、筑摩書房、1968年、72～73ページ。下線部は原文では斜字体。
- (11) バンセルほか、前掲書、第二章を参照。
- (12) Thomas Mann, a.a.O. S. S.354
邦訳: トーマス・マン『非政治的人間の考察（中）』、214ページ。
- (13) 海原峻、前掲書、134ページ以下。
- (14) ハナ・アーレント（大島通義・大島かおり訳）『全体主義の起原 2 帝国主義』、みすず書房、1972年、24ページ以下。
- (15) バンセルほか、前掲書、20ページ、103ページ。
- (16) バンセルほか、前掲書、110ページ以下。
- (17) バンセルほか、前掲書、114ページ以下。

- (18) Thomas Mann, a.a.O. S. S.356f.
邦訳：トーマス・マン『非政治的人間の考察（中）』、217～218ページ。
- (19) Thomas Mann, a.a.O. S. S.358f.
邦訳：トーマス・マン『非政治的人間の考察（中）』、220～221ページ。
- (20) Thomas Mann, a.a.O. S. S.182f.
邦訳：トーマス・マン『非政治的人間の考察（上）』、278ページ。
- (21) Thomas Mann, a.a.O. S. S.183
邦訳：トーマス・マン『非政治的人間の考察（上）』、278～279ページ。
- (22) Heinrich Mann: Essays und Publizistik. Bd.3 (Teil.1 Texte) 1918-1925. Bielefeld (Aisthesis Verlag) 2015, S.251f.
初出：Vossische Zeitung, Berlin, 2. Dez. 1924, Morgenausgabe und 3. Dez. 1924, Morgenausgabe
単行本初出：Heinrich Mann: Sieben Jahre. Chronik der Gedanken und Vorgänge. Berlin, Wien, Leipzig (Paul Zsolnay Verlag) 1929
- (23) ハインリヒとクーデンホーフ＝カレルギー伯爵の構想の違いについては、最新のハインリヒ・マン伝でも指摘されている。Günther Rüter: Heinrich Mann. Ein politischer Träumer. Biographie. Wiesbaden (marix verlag) 2020 S.140f.
- (24) 鹿島守之助（編訳）『クーデンホーフ・カレルギー全集 第一巻』、鹿島研究所出版会、1970年
- (25) Heinrich Mann: Essays und Publizistik. Bd.3/1 1918-1925. S.225
初出：Frankfurter Zeitung, 16. Dez. 1923（以下の記載による。Heinrich Mann: Essays und Publizistik. Bd.3/2 1918-1925. S.818）
- (26) 鹿島守之助、前掲書、15ページ。
- (27) Heinrich Mann: Essays und Publizistik, Bd.5 1930-1933. Bielefeld (Aisthesis Verlag) 2009, S.428
- (28) パトリシア・モルトン（長谷川章訳）『パリ植民地博覧会』、ブリュッケ、2002年、90～91ページ。
- (29) バンセルほか、前掲書、142ページ。
- (30) Heinrich Mann: Essays und Publizistik. Bd.5 1930-1933. S.198ff.
初出：B. Z. am Mittag, 29. Juni 1931（B. Z. am Mittag はドイツで最初の路上販売の新聞。B.Z. は Berliner Zeitung の略。1904年から43年まで出ていた。）
単行本初出：Heinrich Mann: Das öffentliche Leben. Berlin, Wien, Leipzig (Zsolnay Verlag) 1932
- (31) パトリシア・モルトン、前掲書、250ページ。
- (32) アンドレ・ジッド（河盛好蔵訳）『コンゴ紀行』、岩波文庫、1938年。
なおジッドのこの書物については近年、植民地経営批判ではあっても植民地主義批判ではないとする論難もアフリカ系の研究者によってなされている。しかし私の見るところ、現代的な価値観に基準を置きすぎていて、やや偏狭な印象を免れない。Hilaire Mbakop: Normen und Grenzen der Kritik und des Engagements in den politischen Schriften von Heinrich Mann und André Gide zwischen 1923 und 1945. Frankfurt am Main (Peter Lang) 2003
- (33) Manfred Flügge, a.a.O. S.83, 129
- (34) 本論考はハインリヒ・マンの植民地観を扱うものであるから、彼の共産主義観およびソ連観については深入りしないが、1920年代においては彼はボリシェヴィズム＝ソ連には否定的だった。ハインリヒのソ連讃美は、ソ連擁護に熱心だったフォイヒトヴァンガーの影響と、フランス亡命後にソ連から（ソ連で刊行されていたロシア語訳ハインリヒ・マン作品集の印税も含めて）送金を受けていたという経済的事情による面が大きかったようである。以下を参照。Manfred Flügge, a.a.O. S.118f., 123, 125ff.
- (35) Heinrich Mann: Essays und Publizistik. Bd.6-1 1933-1935. Bielefeld (Aisthesis Verlag) 2009, S.597

初出：Die neue Weltbühne. Wochenschrift für Politik, Kunst, Wirtschaft. Prag, Zürich, Paris. Jg.31, Nr.44, 31. Oktober 1935 なお、この時期のハインリヒはイタリアのエチオピア侵攻、及びそれを議題とした国際連盟の会議について他の文章でも触れているが（Heinrich Mann: Essays und Publizistik. Bd.6-1. S.580, 605）、ここで取り上げた部分が、言うならば最も詳しい論述となっている。

③6 Heinrich Mann: Essays und Publizistik Bd.5 1930-1933. S.195

初出：B. Z. am Mittag, 9. Juni 1931

なお、この文章でハインリヒはリヨテ將軍と直接話をしたと述べているが、その信用性には問題があるという指摘がある。これだけでなく、著名人物と話をしたというハインリヒの回想はしばしば「夢物語」だったというのである。Manfred Flüge, a.a.O. S. 95

ちなみにリヨテは王党派であった。この事実は、平野千果子によれば、19世紀後半以降共和派主導で進められた植民地拡大に保守派も賛成したことを意味するものであり、フランスにおける植民地主義への支持が国民的な広がりを持つに至ったことを示しているのだという。平野千果子『フランス植民地主義の歴史』、人文書院、2002年、220ページ以下。

③7 Heinrich Mann: Gesammelte Werke. Bd.24. Ein Zeitalter wird besichtigt. Berlin und Weimar (Aufbau-Verlag) 1982 S.182

③8 Heinrich Mann, a.a.O. S.404

③9 Heinrich Mann: Mut. Essays. Hrsg. v. Peter-Paul Schneider. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch Verlag) 1991, S.236ff. (Erstausgabe: 1939, Paris (Editions du 10 Mai)) 次の二つの引用も同じ。

④0 この点についてはハインリヒ・マンのメモワール『一時代を閲する』を論じた拙稿（本論文の冒頭で言及）を参照。

④1 本論文の執筆時点では第6巻、1935年までが刊行済みで、1936年以降執筆分は未刊。Heinrich Mann: Essays und Publizistik. Kritische Gesamtausgabe in neun Bänden. Bielefeld (Aisthesis Verlag) 2009ff.

④2 小倉英敬『「植民地主義論」再考 グローバルヒストリーとしての「植民地主義批判」に向けて』、揺籃社、2017年、15ページ。なお、オースタハメルは6段階に区分しているの、厳密には小倉とオースタハメルの時代区分は同じではない。オースタハメルの時代区分については以下を参照。ユルゲン・オースタハメル（石井良訳）『植民地主義とは何か』、論創社、2005年、61ページ以下。

④3 コロンブスの呼称は、イタリア語のコロンボ（彼はイタリア生まれ）やスペイン語のコロンなど複数あるが、ここでは日本で一般に使われている呼称を使う。

④4 ラス・カサス（石原保徳訳）『インディアス破壊を弾劾する簡略なる陳述（インディアス群書6）』、現代企画室、1987年。

なお、以下の本文での反ラス・カサス陣営についての記述は、訳者・石原保徳による詳細な解説に依拠している。ただしラス・カサスの言動には時代による限界もむろんあり、初期にはスペイン人と現地人の宥和を説いてそれが逆にスペイン人の新大陸への過剰な進出を正当化してしまったこと、またインディオを救おうとして、体格からしてアフリカ人を連れて来て労働に使ったほうがいいと述べ、アフリカ人の奴隷としての導入に口実を与えてしまったことが挙げられる。

④5 石原保徳『インディアスの発見 ラス・カサスを読む』、田畑書店、1980年、45～46、132ページ。

④6 ビトリア「インディオについて」第一部と第二部：ビトリア（佐々木孝訳）『人類共通の法を求めて』、岩波書店、1993年。

④7 サラマンカ学派の活動については、ビトリア『人類共通の法を求めて』に付された解説の、特に「インディアスとサラマンカ学派」（242～248ページ）を参照。これは、訳者あとがきによれば、石原保徳が執筆したものだという。

④8 ピーター・ヒューム（岩尾龍太郎・正木恒夫・本橋哲也訳）『征服の修辞学 ヨーロッパとカリブ

海先住民、1492-1797年』、法政大学出版局、1995年、114ページ。この引用の前のヒュームの指摘は同書64～65、107～108ページ。なお、W・アレンズ『人喰いの神話』にも邦訳がある（岩波書店、1982年）。

- ④⑨ トマス・モア（平井正穂訳）『ユートピア』、岩波文庫、1957年、2011年改版、110～111ページ。
- ⑤⑩ ハクルート『西方植民論』の邦訳は以下の書物に収録されている。『イギリスの航海と植民 二（大航海時代叢書第Ⅱ期18）』、岩波書店、1985年。また、石原保徳『インディアスの発見 ラス・カサスを読む』、8ページも参照。
- ⑤⑪ スーザン・バック＝モース（岩崎稔・高橋明史訳）『ヘーゲルとハイチ 普遍史の可能性にむけて』、法政大学出版局、2017年、29ページ以下。
- ⑤⑫ E. ウィリアムズ（田中浩訳）『帝国主義と知識人 —イギリスの歴史家たちと西インド—』、岩波書店、1979年。
- ⑤⑬ E. ウィリアムズ、前掲書、58～59ページ。
- ⑤⑭ E. ウィリアムズ、前掲書、66～68ページ。
- ⑤⑮ E. ウィリアムズ、前掲書、112～113ページ。
- ⑤⑯ E. ウィリアムズ、前掲書、217～218ページ。
- ⑤⑰ E. ウィリアムズ、前掲書、246ページ。

ただし、公正を期すために付け加えるなら、これに先立つこと数年、1897年にヴィクトリア女王の即位60周年の記念行事が行われた際、キプリングは「退場の歌」という詩を作っている。

「遠き彼方から呼ばれ、わが艦隊海に溶け去り、
砂丘と岬の火は消ゆる。
見よ、過日のわが栄華は
ニベヴェやティルスと同じなり。」

ニベヴェは古代アッシリアの、ティルスはフェニキアの都市であり、栄華を誇った後没落した。キプリングは大英帝国の最盛期に、すでに没落をも予感していたのである。木畑洋一『イギリス帝国と帝国主義 —比較と関係の視座—』、有志舎、2008年、94ページ以下。

- ⑤⑱ E. ウィリアムズ、前掲書、296～320ページ。
- ⑤⑲ E. ウィリアムズ、前掲書、336ページ。
- ⑥⑩ 木畑洋一、前掲書、8～9、34ページ。
- ⑥⑪ 木畑洋一、前掲書、89ページ。
- ⑥⑫ ジョナサン・スウィフト（平井正穂訳）『ガリヴァー旅行記』、岩波文庫、1980年、420～422ページ。
- ⑥⑬ 小倉英敬、前掲書、117ページ。
- ⑥⑭ 海原峻、前掲書、27ページ。
- ⑥⑮ モンテーニュ（原二郎訳）『エッセー（一）』、岩波文庫、1965年、第一卷第三十一章。
- ⑥⑯ モンテーニュ（原二郎訳）『エッセー（五）』、岩波文庫、1967年、第三卷第六章。
- ⑥⑰ 高岸敦夫「モンテーニュとブラジル」：関西大学『仏語仏文学』、第38号、2012年、143ページ以下。
- ⑥⑱ バック＝モース、前掲書、31ページ以下。
- ⑥⑲ 啓蒙主義の代表的思想家モンテスキューは奴隷制否定論者であったが、近年、有名な『法の精神』の中で黒人奴隷制を擁護しているとして批判されている。「極めて英明なる存在である神が、こんなにも真つ黒な肉体のうちに、魂を、それも善良なる魂を宿らせた、という考えに同調することはできない」（第3部第15編第5章「黒人奴隷制について」）などと述べているからである。しかしこの箇所は「もし私が黒人を奴隷とすることについてわれわれが持っていた権利を擁護しなければなら

ないとしたら、私は次のように述べることになるであろう」という文章に続けて接続法で書かれているのである。岩波文庫版の訳者は、したがってこれをモンテスキューの見解とは受け取れないと述べている。この点について植村邦彦はバック＝モースらの批判をもとにモンテスキューにはやはり差別的な意識があったのではないかと論じている。(植村邦彦『隠された奴隷制』、集英社新書、2019年、24ページ以下。)ただしバック＝モースは『法の精神』を英訳で読んでおり、英語は接続法を持たないがために直説法で訳されている箇所がフランス語のニュアンスをどの程度伝えているかは微妙だろう。(バック＝モース、前掲書、158ページ以下。)しかしバック＝モース以外にもモンテスキューの黒人観を批判している学者がおり、またモンテスキューは黒人奴隷売買により利益を得ていたとの指摘も行っているという。(海原峻、前掲書、61ページ。)

- 70) デイドロ (中川久定訳)『ブーガンヴィル航海記補遺』:『ユートピア旅行記叢書第11巻』、岩波書店、1997年、特にその332ページ以下。
- 71) 海原峻、前掲書、77ページ。
- 72) 平野千果子『フランス植民地主義の歴史』、人文書院、2002年、31ページ以下。
- 73) 平野千果子の前掲書第一章が、「奴隷制」「文明化」「植民地主義」の関係を明快に説明している。
- 74) 海原峻、前掲書、88ページ以下。
- 75) バンセルほか、前掲書、20ページ。
- 76) バンセルほか、前掲書、58～59ページ。
- 77) 海原峻、前掲書、183ページ以下。
- 78) 平野千果子『フランス植民地主義と歴史認識』、岩波書店、2014年、第八章。バンセルほか、前掲書、35～36ページ。
- 79) バック＝モース、前掲書、46ページ以下。
- 80) 磯部裕幸「植民地支配の記憶——想起と抑圧そして忘却」:石田勇治・福永美和子(編)『想起の文化とグローバル市民社会 (現代ドイツへの視座 歴史学的アプローチ)』、勉誠出版、2016年、145ページ以下。
- 81) 以上、第一次大戦以前のドイツにおける社会主義者たちの植民地主義認識に関する記述は、以下の文献に依拠している。栗原久定『ドイツ植民地研究』、パブリブ、2018年、101ページ以下。
- 82) 磯部裕幸『アフリカ眠り病とドイツ植民地主義 熱帯医学による感染症制圧の夢と現実』、みすず書房、2018年、228ページ。
- 83) 磯部裕幸「植民地支配の記憶」、151ページ。
- 84) この戦争は、ドイツの植民地支配の残虐性を示す例としてしばしば挙げられる。1904年から1908年にかけて西南アフリカ植民地での戦争において、現地ドイツ軍司令官フォン・トロータの軍事的指示により現地人ヘレロは人口8万人中6万4千人が、ナマは2万人中1万人が殺戮されたとされる。磯部裕幸、「植民地支配の記憶」、147ページ。永原陽子「ナミビアの植民地戦争と「植民地責任」」:永原陽子(編)『「植民地責任」論』、青木書店、2009年、218ページ以下。
- 85) この点については拙著を参照。三浦淳『若きマン兄弟の確執』、知泉書館、2006年。
- 86) グレゴリー・クレイズ (巽孝之監訳、小畑拓也訳)『ユートピアの歴史』、東洋書林、2013年、297～298ページ。

追記

本論文は第一次世界大戦期以降におけるハインリヒ・マンの植民地観を究明することを目的としているが、資料面での制約のために晩年のハインリヒについては不十分になっている可能性がある。ハインリヒの発言はドイツで刊行中の批判版エッセイ全集(Heinrich Mann: Essays und Publizistik)に基づいて検証したが、注41で触れたようにこのエッセイ全集は目下1935年分までしか刊行されて

いない。そのため本論文では、1936年以降のハインリヒの発言に関しては、彼の生前に刊行されその後解説などを付して再刊されているエッセイ集2冊、すなわち『その日が来た ドイツ読本 Es kommt der Tag. Deutsches Lesebuch』（1936年）と『勇気 Mut』（1939年）、及び晩年のメモワール『一時代を閲する Ein Zeitalter wird besichtigt』（1946年）をもとに検証した。将来批判版エッセイ全集が1936年以降分についても刊行されれば、以上の3冊に収録されていなかった植民地言説が発見される可能性がある。その点に留意していただければ幸いである。